魔法をほとんど使わない魔法使い

発砲スチロール

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法をほとんど使わない魔法使い

【Ｎコード】
Ｎ８０３５Ｔ

【作者名】
発砲スチロール

【あらすじ】
面識すらない女の子から突然妙な力をもらって色んなアニメ、漫画の世界で原作を引っ掻き回すオリ主最強ものです

主人公設定（前書き）

この小説はオリ主最強物で原作破壊でキャラ死亡もありうる劇物です
取り扱いと用法用量を正しく守ってお使いください。この小説を摂
取してから
体に変調をきたした場合、すぐにブラウザバックで戻ってください

主人公設定

とある魔法使いの放浪日記

主人公設定

名前（こがみ）　古髪（ひょうか）豹化

特徴　日本人特有の黒い髪に瞳、そして黄色い肌を持ったオタク青年　今は全寮制の高校に在学中

両親は幼い頃に他界しており書類では叔父が保護者と言うことになっているが顔も見たことがない

事実上の養育放棄を受けて育ってきた

年齢　１７歳

趣味　力を貰うまではただのオタク趣味　ただし、力を貰ってからは新魔法、新魔術の開発、喫煙、
釣り、日曜大工など、かなり多趣味になった

主人公設定（後書き）

ああ、やっちまったぜ・・・

今回が初投稿です。どうにか完結を目指すのでよろしくお願いします

ＰＳ．感想できればよろしくお願いします

第一話　【いやあ、腐った死体に追いかけ回されるのって良い気分じゃないね】

一話目投下します

第一話　【いやあ、腐った死体に追いかけ回されるのって良い気分じゃないね】

さて、ここはどこだろう？

送り出してくれるっていうから頼んだんだけどさ？せめて行き先くらいは教えてくんないかな？

転移した先はなにやらごちゃごちゃとした部屋で外の状況は分からないし目の前のドアも開かない

どうしたものか・・・・・

「おお？こんな所に窓発見」

早速窓を開けようとするが、錆び付いていてなかなか開かない

この物置の所有者には申し訳ないが、仕方がないから破壊させてもらうことにした

窓枠を掴み、取りあえず引っ張ってみる

すると、簡単に窓がひしゃげて取れた。いやあ、この体ガラスの破片が降り注いでも傷ひとつ負わない

とか、どんだけ丈夫なんだか・・・

「まぁ、貧弱じゃないだけいいか・・・って、ん？何だこれ」

どうやら俺が今いる場所はどこぞの店舗の物置らしい。何に使うのかもわからないガラクタや段ボール
箱やらで溢れていてかなり混沌としている

「・・・・・・・いや、ちょっと待て。そもそもココどこだよ？」
窓から頭を出して外を見ると、そこには夜の空にきらめくネオンに彩られた”英文字の”看板が立ち並ぶ

「・・・え、何？ここ英語圏？」

そして、耳を澄ませばどこからか響いてくるサイレン音とパン！パン！　という破裂音っぽい音

日本のパトカーが使っているサイレン音とはなんだか違う気がする。つうか、町並みも違うし

「それ以前に、さっきの炸裂音って銃声だよな？」

サイレンに銃声？・・・もしかして、とってもやばいとこに来ちゃったのか俺？！

・・・とりあえず、頭を引っ込めよう。流れ弾に当たったりしたらアホ過ぎるし

そう思って左右を確認しつつ頭を引っ込め・・・・・る？

「はぁ？」

そして俺の目の前を拳銃をブッ放ちながら通り過ぎる二人組み

「オイオイオイ！」

われながら間抜けな声だと思ったがそれは仕方ないと思う。だけど目の前で警官隊が銃をぶっ放しながら半狂乱で逃げ回っているところなんて見たら誰でもそうなるはずだ。・・・多分

どうやら凄まじい世界に来てしまったようだ。いきなりこんな光景を見ることになるとは・・・・・

と、そんなことを考えているうちに、警官の一人が此方に気がついて叫んだ

「そこの君！何をしているんだ、早く逃げろ！ヤツラが来るぞ！」

はい？ヤツラ？ヤツラって誰さ

疑問に思いつつも、通りを見渡すと、警官の一人に抱きついて首根っこに噛り付いてる女の子一（顔の肉が一部欠如している）を見つけた

「・・・・・・はい？」

辺りを気にも留めずガツガツと首筋の肉を噛み千切り飲み込んでいる

そういえばうめき声も辺りから聞こえてきている・・

・・・・・うわーお、もしかしなくてもゾンビだよあれ、つまりここはアメリカのラクーンシティですかチクショー

バイオなんですかバイオなんですねバイオなんですよの三段活用！！

・・・・・・ああそういえばあの警官アウトブレイクで見たことあるぞ

確か一瞬でゾンビの群れに飲まれたチョイ役だ。声が笑えたから覚えてるぞ

あはは、どうしよう・・・これ

・・・つまりあれだ、今になって後悔してるよ俺は・・ちくしょう、あんなやつに願い事しなければよかった

「う、うわぁぁぁぁぁ！た、助け・・・アッーーー！！」

あ、警官隊全滅した・・・

ご愁傷様・・・・・・

事の発端は、少し時間をさかのぼること半時前・・・・・・・

ゲーセンでガンシューティングに白熱しすぎて時間を忘れていた俺は帰路の道を急いでいた

「はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・ヤバイってこの時間は！」

このままだと寮の門限に遅れる事は確定だ。そうすると・・・・・・

「寮監に殴っ血ＫＩＬＬされる・・・」

ぅぅ、やばい・・・あのおっさん融通効かないからなぁ

ともかく、このまま出来るだけ早く寮まで行こう。自分の部屋まで行けばどうって事無いはずだ。

普段は通らない細い路地や、小汚い飲食店の裏、汚水の流れている小川に掛かったボロ橋を渡ったある路地裏で

「そこな若人、私の話を聞きなさい」

俺はそいつに出会った

第一話　【いやあ、腐った死体に追いかけ回されるのって良い気分じゃないね】

連続更新です。どうか見てやってください

第二話　【アウトブレイクってマイナーだよね？】（前書き）

もういっちょ投下です。お目汚しですがどうぞご覧ください

第二話　【アウトブレイクってマイナーだよね？】

「おｋおｋ、つまりあれだな、お宅は平行世界を飛び回って人を救っている人でそろそろ心の限界が来ている。そしてその後釜として俺を選んだ」
見た目は俺と同じくらいの女の子曰く、自分はそろそろ精神と人格が磨耗しつくしたのでそろそろ消えたいんだそうだ
だが自分の志は誰かに継いでもらいたいので自分の後釜に据える事のできる者を探していたらしい
「そういうこと。ほら、受け取りなさい。貴方に必要な知識と魔道の力よ」
そいつの声がした瞬間、頭の中へ大量の知識が流れ込んできた
・・・正直、気持ち悪いことこの上ない　さらに、体の中から湧き上がってくるこの力・・・なんだか何でもできるような気がする
早速試してみようと手のひらを空に向けて
「スター●イトブレイカー！」
とか魔砲の呪文を唱えてみる
・・・まぁ、そんなこと出来る訳が・・・・・

「うえぇぃ？！ちょ、おま！手からなんか出たーーー！」
手のひらから迸る艶のない漆黒の光。色は違うがそれは確かにあの魔砲だった
「おいおい、いいのかこれ？！こんな力貰っちゃっていいの？！」
なんかデバイスもなしにすごいの撃てたぞ！
チートサイコー！
・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・

・・・

・・・・・・と、まあそんな調子で自分の力を確認しているとそいつから声がかかる
「もういいかしら？そろそろ次のものを渡したいんだけど？」
ヤー、無論ですとも。何をくれるんだい？
「これよ」
渡されたのは白鳥の羽のように白い外套だった。そいつが言うにはこの外套はどうやら身を守る防具らしい
そいつ曰く、
「ＴＮＴ５０？くらいなら何とかなるわ」とのこと
いやいや、それすごすぎません？どんだけ強度あるんだよそれ・・・
ってあれ、少しサイズが小さいぞ？
聞いてみることにする
「ああ、それでいいの。気にしないで」
はぐらかされてしまった。まあいいか・・・
「次はこれ」
次に渡されたのは何も入ってない旅行カバンと、研磨されているはずなのに妙に光沢のない黒い石に穴を開けてチェーンを通しただけのペンダント
カバンのほうは見た目より多く物が入るカバン（本人識別の魔法がかかった）で、ペンダントはもしカバンを忘れてきてしまってもそのペンダントに魔力を通せばカバンが目の前に召還できるらしいが、なんだか作りが女物っぽい気がする
「うっ（ゾクゾクッ）」
さ、寒気？！・・・・・何だか嫌な予感がする

「つぎはこれ」
今度は光り輝く光の球を差し出してきた
「とりこんで」
どうしたらいいかわからなかったので取りあえずソレに手を伸ばし、吸い込むイメージを浮かべてみる
すると光の球は手のひらに吸い込まれて消えてしまった
そして体を覆う激痛。思わず上がる悲鳴
「あいでででででで！」
そこ、みっともないとか言わない。ほんとに痛いんだからさ・・・
しばらくして痛みも消え、動けるようになってからあることに気づく
あれ？何か、背が低くなったような・・・どうなったのだろうか、聞いてみることにする
「リンカーコア、並びに魔術回路を入れただけ。気にしないで」
いや、間違いなく背が低くなってるんですけど・・・・
「き　に　し　な　い　で　」
イエスサー、分かったからそんなに殺気出さないで。プリーズ
「・・・で、後は何をくれるんだ？神様」
「これとこれ、この二つで最後よ」
渡されたのは小さいカプセル剤と刃渡り３０ｃｍほどのダガーの化け物（ブレードの色は黒）
カプセル剤は今飲んで欲しいとのことなので飲み込む
・・・また痛い目にあったりしないよな？
結局、左目が少しむず痒くなったが今はもうなんともない。何の薬なのだろうか？
「貴方だって老衰や外傷で死にたくないでしょ？」
はいはい、二次元でもよくありがちな不老不死ですね、分かります・・・・・
そしてもう一つのこのダガーの化け物はデバイスで実際に切り付ける事もできるらしい
名前はないので自分でつけろ、とのことで、取りあえず名前を考え

てみた
「よし、お前の名前はネロだ」
どこの国の言葉だったか忘れたが、”黒”という意味がある言葉だ
刀身が黒いこいつには合っているだろう
すると早速手の中の相棒がソレに答えた
『本体名”ネロ”登録、起動確認　おはようございますマスター』
「ああ、こちらこそよろしくな相棒」
さて、挨拶も済んだし話を聞くとしよう
「あとは何かある？」
「ないわ」
「うい、了解　あとは？」
「無いわ。あと、初めだけ転送してあげるわ感謝しなさい」
おお、それはありがたい。正直、魔法の使い方はまだよく分かって
ないんだよ俺
「送るわよ、いいわね？」
正直親に何も言っていないのが心に残るがまあいいだろう。だけど
最後に聞きたいことがあった
「なあんた、何で俺を選んだんだ？」
するとそいつは表現できない表情を浮かべてこう言った
「貴方にもそのうち分かるわ」
「？・・・どういうッ」
「ああそれと、コレは私的なアドバイスだけど、　自分の生き甲斐を
見つけなさい。そうしないと、きついわよ」
どういうことか聞く前に目の前が白く染まった。　世界を超えている
のだろう
「貴方にもそのうち分かるわ」「自分の生き甲斐を見つけなさい。」
か・・・どういうことだ？
まあ、いいかそいつは俺にもいつか分かると言ったんだから・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・

一話目はじめに戻る→

どうしたものかね・・・
そこでふとあの旅行カバンが目に入る
せっかくたくさん荷物がもてるんだから銃でも入手するか
全滅してしまった警官隊達を美味しく頂いているゾンビーズを尻目に行動を開始
「それにしてもキモいなコレ・・・」
本当にキモい。そこら中で人が人を食っている光景を見ていれば当たり前の感想だと思う
見つけた銃砲店に入る俺
幸運にも無人で、略奪にもあっていないのか銃も弾もまだ豊富にあった
・・・まぁ、それはいいんだけどさ・・・
「ガンショップ「夜露死苦」って・・・・・」
ここの店長、字の意味分かってこの名前にしたのか？センスを疑うよ俺は・・・・・・・・・まあいい、さっさと頂いてしまおう
カバンを開いて店のカウンターに載せると店内に飾ってある武器を選んで片っ端から放り込んでいく
例としてはベレッタＭ９２Ｆ、コルトガバメント、ワルサーＰ９９、スタームルガー・レッドホーク、Ｍ－５００、コンデンターピストル、Ｍ３スーパー９０などなど、
弾丸も店にあるだけ放り込んでいると弾頭を加工する機材を発見し

たので早速加工する
電源を入れて、加工する弾丸を投入口に流し込む
そして加工法を選択してスイッチオン
駆動音とともに加工を開始あとは時々投入口に残りの弾丸を流し込んで待つだけだ

・・・・・・・・・
・・・・・・・・
・・・・・
・・

できた弾丸はまた箱に入れておく
加工した弾丸は7．62?×63　Ｓｐｒｉｎｇｆｉｅｌｄ弾・・・
本当はライフルで撃つ小銃弾だけど、俺はそれを
コンデンターピストルに突っ込んで撃ち出す気でいた
「ふぅ・・・」
いやぁ、これだけあればいいだろう。次は服を調達しよう
・・・制服でゾンビと戦闘なんてしたくないし
俺が去っていった店内は何もかも持ち去られていた
『マスター、些かオーバーキルでは？それにマスターには私がいます。銃は必要ないかと』
「いや、その・・・ねぇ？」
ち、違うぞ、決して本物の銃がほしかったからじゃないぞ！
『つまり私欲ですか』
ぐはっ　す、ストレートに言うなよ・・・・
『ところでマスター、血中の乳酸値が上がっています。どこかで休

息を取ることをおすすめします』
話の転換早?！いや、でも今日は色々あって疲れたし、休める物なら休みたいけど・・・うーん、どこか休めそうな場所って無いかなぁ

おまけ

「くっ50AEどころか9?もないなんて・・・・」

・・・・・・・・・・・・バイオ2の主人公レオンが弾不足でひどい目に遭っていた

「ぎにゃぁぁぁぁぁーーーーーー!?！ナイフどこだーー?！」

・・・・・・合掌

第二話　【アウトブレイクってマイナーだよね？】（後書き）

彼一（彼女？）の武器弾薬はこれからどんどん増えていきます・・・

次回は、とってもマイナーなキャラが登場します

・・・どうかあまり期待せずにお待ちを

第三話　【ＴＳ？もうどうにでもなれ、ド畜生・・・】（前書き）

はじめたからにはひたすら書いて投下していきます！

第三話　【ＴＳ？もうどうにでもなれ、ド畜生・・・】

昨日はあの後、スーパーを見つけて、そこの天井裏に隠れて睡眠を取った

そして二日目の朝　いい加減制服以外の服を着たくなった俺はスーパーの中に併設されたアパレルショップに顔を出した

アメリカ人の服デケェ・・・とか言いながら苦労して自分の服のサイズを思い出すと、今度はサイズ通りの服を探し出して

試着室に入る。そして目の前にある大きな姿見を見て

「うぇぇぇ？！なんですと？！！」

悲鳴を上げた

仕方ないじゃんか服を選んで鏡の前に立ったらあの女の子そっくりの姿のオレがいたんだよ？

もう本当に何でもありだね、いやマジで・・・・・・・・・服選び直すか・・・下着も買わなきゃ・・・・・いや、それ以前にサイズどうしよう・・・つーか、元の体より背縮んだな。１８０ｃｍと少しくらいしかないぞ

元の体は２００ｃｍ超えてたのに・・・・・

「はぁ・・・」

目頭から心の汗を湧き上がらせながらため息をつき、改めて鏡に映る自分の姿を見る

腰まである黒髪に細い指、整った顔立ちに今まで気づかなかったが綺麗な声、そして左目の紫色の瞳と形の代わった瞳孔

・・・何だろう、この体でも良いかもって思えてきた。カッコイイぞこの姿

俺単純・・・・・ってていうか、下着とかってどういう風に選べばいいの？俺知らんよ？

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・
・・・・・
・・・
・・
・

そんなこんなで選んだ下着はスポーツブラ（だっけ？）（サイズはBでぴったりだった）と無地の白いショーツ（って言うんだよね、確か？）を着て

その次に下は生地の厚いミリタリーズボンを丈夫そうなベルトできっちり止めてさっきの銃砲店で持ってきた膝上まで覆うブーツを履いて

その上からさらに膝当てと脛当てを付ける。後は両腰と両太ももに大型オート用ホルスター、両ふくらはぎに小型オート用ホルスターを装着、上は動きやすくするためにTシャツの上にミリタリージャケットを着込んでいる。さらに腕を守るために膝当てを巻き付ける

後はホルスターに銃を、マガジンポーチにマガジンを仕舞う。ああ後、ネロもダガーモードにして仕舞っておかないと・・・

ついでに隣に併設されていたショッピングモールからスポーツドリンクを1ダースと固形食料一週間分を例のカバンに放り込み

左目を隠すためにサングラスをかける

「武装化完☆了！」
『まるでハリネズミですね、マスター』
はははは、良いじゃないかハリネズミで。生きたまま咬みつかれるよりはマシだって
『所でマスター、これからどう行動するつもりですか？』
ああ、とりあえずこの町から人を助けられるだけ助けていく気でいるけど

『そうですか』
さて、誰か助けを求める一般人はいないかな？まあ、とりあえず外に出よう
「・・・アレ？」
通りをゾンビに追いかけられて爆走している3人組を発見。うわあ、派手に叫び声上げてるなぁ、
それじゃあもっと寄ってくるだろうに・・・・あ、一人コケた。あれ、どこかで見た事があるような・・・・・
いや、それよりもあの3人組を助けてさっさとの世界から立ち去るかなんて考えている内に転んだ人にゾンビがのしかかっている
「やっべ、やられるぞアレ」
銃は・・・まだ練習もしてないから無理。仕方がない、それなら！！
「ネロ！頼む！」
『了解、加速魔法、展開します』
加速魔法で接近して倒す！それしかないだろ
目の前のゾンビの後頭部にダガーモードのネロを振り下ろす。
手に伝わってくる骨と肉を貫く手応えと音、簡単にそのゾンビは息絶えた。が、あと十匹ほどいる
さっさと終わらせたいからスピードでいくとしよう
「ネロ、第四形態」
『了解、第四形態へ変形します』
グリップが長くなりブレードが揺るやかな曲線の入った片刃になり、

刃渡りも1mほどになる
変形も終わり、あいつらをバラそうと一歩踏み出すと後ろから呼び止められた
「おい、あんた、何考えてやがる！そんな刃物一本でどうにかなる奴らじゃねえぞ！こっちに来い
逃げるぞ！」
ふふふ、その心配はない。なぜならこの体は、戦うことに特化しているのだから
だからその言葉に返す答えは無論こうだ
「大丈夫、俺は負けないよ。何てったって魔法使いなんだから」
さて、戦闘開始だ

（デビッド）

オレは目を疑った。一回瞬きをしただけの時間でここから数十m離れた所から倒れたヨーコの元へ移動し、そのままのし掛かっているゾンビ
の後頭部へ一撃かまして無力化、更に不思議なことにいつの間にかナイフが長物に代わった
アレは確か・・・ジャパンの武器、カタナだったか？
それに彼女はどうしてあんなに手慣れているのだろうか？
いや、それ以前に何故ナイフがあんな物に変形したのだろうか？
「っ！？」

路地からウジャウジャと奴らが湧いて来やがった
クソッどこか逃げる場所は?!
周りを見渡すとふと彼女が奴らに向かっていくのが目に入る
隣のポリ公、ケビンもこれには慌てて警告をする。が
「大丈夫、俺は負けないよ。何てったって魔法使いなんだから」
・・・・・・何だって、魔法使い?ハリーポッターにでもなったつもりか?
そう思っているとケビンに話しかけられた
「ヘイヘイ見てみろよデイビッド、まるでカートゥーンだぜ!スッゲェ!」
ケビンが指さした所を見ると俺は不覚にも見惚れちまった

――――――――――――――近づいてきた一体の首を切り落とすと、
そのまま猛然と走り出してすれ違いざまに次々と奴らの首を切り落としていく

そしてそのまま突き進み、どんどん首を落としている

やっていることは野蛮なのに何故か、それがとても美しく見えた

第三話　【ＴＳ？もうどうにでもなれ、ド畜生・・・】（後書き）

眠い目をこすりながら更新したんで誤字が無いか心配です

後ひとつふたつは更新したいんですけど・・・それまで持つかな、

俺の体力・・・

それと、出しました。バイオのキャラ

原作はバイオハザードアウトブレイクってゲームのキャラクターなんですが

やけに人数が多いせいで次回の話は少しグダグダになるかもしれないです

第四話　【アウトブレイクメンバー全員集合！って、８人もいるの！？】（前書

一気に人数が増えてぐだぐたになってるような気が否めませんが・・・

とりあえずもう一話投下です

第四話　【アウトブレイクメンバー全員集合！って、８人もいるの！？】

「うはあぁ、生き返るぜ・・・」
「もっきゅもっきゅ」
「いただきまーす！」
「コイツは有り難てぇぜ！」
「・・・ふん、ウマイじゃないか・・・」
「うーん、久しぶりの食事だわあ！」
「こんなにこの携帯食がおいしかったなんてしらなかった・・・・・」

どうも古髪豹化です。あのあと、アウトブレイクメンバーの皆さんと合流して自己紹介としゃれ込もうかと思ったら
アリッサ女史が目聡くジャケットに挟んだ食料を見つけてしまい、
後の七人に自分達にも分けてくれとせがまれ、
気づいたら水も食料も全て食い尽くされてしまいました・・・・・・・

「なあに、また取りに行けばいいじゃねえか、どうせ近くにあるんだろその店？」

いや、随分暢気なこと行ってくれるねケビン君そこまで行くのにどんだけ奴らが居たか分かってんの？

「・・・・まあいい、まずは自己紹介と行こうか。」

いや、オレはみんなのこと知ってるけど、一応ね。

「俺はケビンだ、警官やってる。よろしくな！べっぴんちゃん！」
うん、ゲーム内では君の特攻癖に随分と悩まされたよ。よろしく。
あとそれから次女の子扱いしたら千切るぞ？
「私はマークだ、警備員をしている。生き残るためにがんばろうじゃないか」
うい、よろしく。ゲーム内では一番助けられてるよアンタには
「オレはジムっていうんだ、駅員やってる。よろしくな」
バイオ史上最強のチキンか。まあよろしく
「ジョージだ、職業は医者だから、怪我をしたら私に言ってくれ」
ゾンビにカプセルシューターで抗ウイルス薬詰めて撃つとすごいよね。・・・・いや、それより何で抗ウイルス薬作れんの？　アンタ・・・・
「デイビッドだ」
おお出たな、アウトブレイク一の迷子ちゃん。・・・バッテリーで爆弾作るのはどうかと思うよ？
「アリッサよ、職業は新聞記者」
ピッキングツールでどんな取材をしていたのか小一時間問いつめたいんだが、どうだ？

「私はシンディ、バーでウエイトレスをしていたわ。私も止血帯とハーブを少し持っているから
ジョージほどじゃないけど傷の治療ができるから、よろしく」
うーん、俺って不死身だから必要ないんだよね。気持ちだけ受け取っておくよ

「え、えっと、ヨーコ・スズキです。あの、もしかして日本人ですか？」
うん？まあそうだと答えておくよ
さてあっちは名乗ったしこっちも名乗・・・・本名言わない方がいいかな、ラクーン脱出後に色々嗅ぎ回れるのやだし

どうしよう、名前・・・・・・しょうがない、アニメのパクるか
「ああ、俺の名前はナイアトース・トホテップだ。先に会った3人には言ってあるが魔法使いだ」
正直、ろくな魔法使いじゃないけど
いやあ、魔術、魔法、どれを見ても回復系の呪文が1つもなかったんだよ
あるのは広域空間攻撃とか完全消滅とかといった物騒な物ばかり、つまり、回復系の魔術や魔法はこうして旅をしている
道中で集めるか自分で作れと言うことだろうか？

「へぇ、ナイア・・・トース・・・・・ねぇ・・・」
？今アリッサの眼が光った気が・・・・
「ねえ、あなた、本当は何て言うの？自分の子供にそんな名前使うなんてあり得ないもの」
うわっばれてら、まあ確かにそうだろうけど
「いや、俺はどうしても身元を隠さないといけない理由があってね。

申し訳ないけどそれ以上は聞かないでくれ」
「・・・・そう、分かったわ。でも何時か取材させなさいよ」
それはよかった、これで引き下がってくれなかったらどうしようかと思ったよ
どうやら第一印象もそれほど悪くないようだ。それにヨーコを助けたこともプラスに働いたのだろう
このあとは雑談を交えながら脱出法について話し合った

ああ、そうだ後で武器渡しておかないとな。明日は9人総出で脱出しないと

おまけ
『マスター、何をしているんです？』
「ん？オリジナル魔法の開発」
『手伝いましょうか？』
「ああ、頼むよ」

『ついでにあの魔術書も少し書き進めた方がよいのではありませんか？』

「あー、”外神技法記述書”か。まぁ少しくらいなら進めるか」

第四話　【アウトブレイクメンバー全員集合！って、８人もいるの！？】（後書

結局、グダグダで短いだけの話になってしまいました（泣

これからも精進いたしますので今はどうかご勘弁を

第五話　【え、暴君？みんなで囲んで袋にしちまえばいいだろ？・・・ごめん、

投下です

第五話　【え、暴君？みんなで囲んで袋にしちまえばいいだろ？・・・ごめん、

夜が明けて太陽が顔を出した頃、俺は立てこもっている家の屋根に上りボウガンで周りをうろついているゾンビを始末していた
ボウガンの射程に入ったゾンビの眉間にカーボン製の矢を一本突き立てるだけでそいつは動かなくなる。奴らは動きが緩慢で
そんな奴らに矢を当てるのは容易いことだった

しばらくそのまま奴らを狩り続けていると屋根に誰かが上ってきた。足音からして奴らではないのでそのまま放っておいて
そのまま狩りを続行する

「よお、精が出るな。今日の朝飯はゾンビのステーキか？」

「・・・うげ」

・・・・ケビン、どうしてくれる。想像して気持ち悪くなったじゃないか。

そのせいでボウガンが少しぶれてブティックのショーウィンドーを打ち抜いてしまう

まったく、集まってきちまうだろうが

「あー、ワリィ、始末するの手伝うから赦してくれ」

まあ、それなら良いだろう

「そこにもう一つ予備のボウガンが転がってるから使え。」

使い方は分かるだろう？

「ケビンはとりあえず比較的俺たちに近い奴らを狙ってくれ。俺は遠くの奴らを狙うから。」

景気よく返事を返したケビンは、そのまま矢を装填し１０ｍほど先のゾンビの頭を串刺しにする

へぇ、実技だけはＳ．Ｔ．Ａ．Ｓ．並みってか？確かこの人、採用試験で実技はパスするものの面接で二回も落とされたんだっけ

・・・それって凄く格好悪いね、うん

（２人とも終始無言で狩り続ける）

・・・・・無性に煙草が欲しくなったな。ケビンって持ってたっけ？

「なあ、ケビン煙草持ってないか？」

この頃全然吸って無くていい加減我慢の限界なんだよね

「バカ、警官は体が基本だぞ？そんなモン吸うわけ無いだろ」

おやそれは意外だ。スパスパ吸ってそうなイメージがあるけど

・・・あれ、原作で吸ってるシーンがあったような気がするんだけど

気のせいだっけ？

「っていうかそれ以前にお前まだ未成年だろ？」

コイツの口からそんな言葉を聞けるとは思わなかった

「うるさい、俺の5年以上前から続く習慣だ。口は挟めさせねえぞ

？」

「そうかい、そんなに吸いたきゃデイビッドにでも頼みな。あいつ確かラッキーストライク持ってたはずだぜ」

ふむ、ならちょっと抜けて貰いに行ってくるか

「悪いが少し席を外すぞ。何本かもらってくる」

そう言って席を立つ。下に降りるとき、ケビンが「オイ待てよ、此処俺一人で守るのか？！」とか言ってたけど

それよりもまず煙草だ煙草、早く吸いてぇ・・・・・

（ケビン）

ああクソ、いっちまったよ。

あいつらを俺一人でやれってのかよ。全く、自分が撒いた種だとは言ってもちっときついモンがあるぜ

そう思いつつボウガンに矢を装填しつつ周りを見渡すと、後３０体ほどが射程範囲内をウロついていた

ナイアが煙草持ってくる前に全部片づけておいてやろう。食料もらった恩もあるしな。だからここは一丁ゆっくりと一服してもらおう

そう考えたケビンは一番隠れ家に近いゾンビの額に狙いを付け、矢を放つ。

放たれた矢は狙い違わずゾンビの眉間に突き刺さった。

「Ｙｅｓ！直撃だぜ！！」

「ん？なんだアレ？」

無事にデイビッドから煙草をもらうことが出来た俺は屋根に上る途中、ふと横を振り返る

「・・・・・じーざす・・・・・・・・・」

見なけりゃよかった・・・後悔しても遅いけど

大量の奴らと素手で格闘して、あまつさえ奴らを圧倒しているとんでも無い人影が1つ、何となく嫌な予感がするが強化魔術で眼を強化して
人影を確認する

スキンヘッドの頭に3、4mもの長身、手にはゾンビの返り血がベットリ付いた大爪に青白い、血の通ってないようで至る所が爬虫類を思わせる鱗（？）で覆われた皮膚

そして不自然に盛り上がった背中

「はい、タイラントですね。しかもRですかそうですか。・・・ってヲイ！？」

誰だよ？！タイラントボコボコにして第二形態に変形させた馬鹿は？！

コイツ、銃弾だとあんまりよろけてくれないんだよ？！一回気絶させる前にみんな皆殺しになるだろうが！

おkおk、ここは一つ一服しながら考えよう

ぽく

ぽく

ぽく

ぽく

ちーん！

・・・・よし、とりあえずみんなを起こして逃げるか

おまけ

「なぁジル、さっきの禿頭って何だったんだ？」

「さあ、目があったらいきなり走ってきたからロケランぶち込んじゃったけど」

「まぁ、敵っぽかったしいいんじゃない？さ、いくわよカルロス。時計塔に行けば助けが来るんだから」

「おう、後少しだな」

「スターーーーズ！！！」

「「出たぁぁぁぁぁぁぁ！！追跡者だ逃げろおおぉぉぉ！！！」」

タイラントをボコったのはコイツらだったらしい・・・・・

第五話　【え、暴君？みんなで囲んで袋にしちまえばいいだろ？・・・ごめん、

ぜんぜん進んでない・・・ただのギャグで終わっちまった・・・

第六話　【ハイゥエイで脱出？まぁそれでいいか】（前書き）

駄文投下です

第六話　【ハイゥエイで脱出？まぁそれでいいか】

あの後みんなを集めて隠れ家を脱出して、いろいろな場所を転々としつつ昨夜話し合った通りに大通りを突破してハイゥエィを目指しているんだが・・・・・・・

「わー？！こっち来た？！」

「クソッタレ！」

「くっ・・・・」

「・・・クソ」

「まいったな・・・・・」

「こっちにもきたわ！」

「こないでよ！」

「もう嫌！」

後少しの所でゾンビの大群にぶつかってしまい只今絶賛発砲中ですアウトブレイクメンバーのみんなもかなり苛ついている模様　え、俺は何してるかって？

「おおおお！っ【紫電・一閃！】」

ゾンビと格闘戦中ですが何か？日本刀が火を纏ったのを見てジョージが唖然としているけど気にしない

「本当に魔法使いだったのかい？」

いや、そう言っただろ？

「それにしても、全然数が減らないんですけど・・・・・・・」

いい加減一体ずつ相手するのも嫌になってきたな・・・なら、アレ使うか

「大技行くぞ、みんな俺の後ろに来い！」

皆を下がらせてからネロに指示を出す

「纏めて消す！できるな、ネロ！」

『勿論です。』

よっしゃ、行くぜ！

『【砲撃スフィア5門展開】マスター、展開終了しました。いつでもどうぞ』
「了解、・・・消し飛ばせ！」
「【スコーピオン】！！」
「いい加減眠りやがれ！死体共！」
撃ち出された魔力砲撃は無機物、有機物区別することなく全てを喰らい尽くす
後に残るのはアスファルトが全て無くなって土が丸見えになったメインストリートだった

（アリッサ）

何なのそれ?！
火を噴くカタナの次は黒い何かで大通りに居る奴らをメインストリートごと根こそぎ吹き飛ばすなんて！
この通りって片側だけでも三車線あるのよ?！一体何があったの?
こんな事が出来るなんて、まさかあの子本当に?

「魔法使い・・・・・・」

うん、ここに来てから組んだオリジナルだけど何とか発動したみたいだ。実射テストもしてないから正直使えるかわかんなかったけど

「魔法使い・・・・・・・」

後ろから怯えたようなアリッサの声がした

うん？やっぱり不味かったかな？みんな怖がってるよ・・・・

「だいじょ」
慌てて距離をとられる。どうやらこちらが怖いらしい
まあ、仕方がないか。あんな事出来る奴が人間のはず無いもんな・・・
この力を受け取ったときから何となく予想していたが、やっぱり辛いものは辛い・・・・・・・・この様子だとこれからはみんなから別れて
影から助けていった方が良いようだ
「俺が怖いなら良い、そのまま去ろう。ただ、俺は皆の脱出と安全のためにこれを使ったんだ。間違っても皆にこれを向けたりなんてしない。それは分かってくれないか？」
まあ、期待はしないけど。・・・・・
不覚にも涙が出てきた。でも仕方がないさっさと消えるとしよう。
今の俺はみんなにとって驚異以外の何者でもない
みんなに背を向けて、歩き出そうとした所で
「待って！」
と、呼び止められた

（ヨーコ）
悲しそうに語るナイアが、私はなんだかすごく放っておけなくって
「待って！」

ナイアに声をかけた。私はナイアが怖いとは思わなかった。さっきはびっくりしてつい距離をとってしまったけど
だけどさっきの言葉に嘘があるとは思えなかった。だから私は・・・
「私をハイゥエイに連れて行って！ナイアもそこから脱出するんでしょ？！」
付いていくことにした。そして他のみんなにも
「みんなも行きましょう！」

と、促した

みんなはしばらくナイアの目を見てその悲しみの色をサングラス越しに見て次々とナイアの元に集まった
ナイアは、集まってきた私たちを見ると余程さっきのことがショックだったのか、かけていたサングラスを取って私に抱きついて泣き出してしまった
「うあぁぁぁぁぁぁ、ぅぅぅぅぅっ！」
私はナイアの頭をなでながら、みんなと一緒にさっきのことの謝罪をして泣きやむのを待った

もう、恥ずかしいったらない。あの後、泣いた勢いで自分が男だっ

たことや力を得るきっかけなど全てぶちまけちまったけど
皆はそれを受け入れてくれて、また一緒に行こうと言ってくれた。
ほんと、いい人達だ

と、ともかく俺は今ハイゥエイにみんなを運んでいるところ
やり方としては近くまで来たら後は2人ずつ抱えて飛行魔法で一直線だけだ。皆の負担にならないように、でも迅速に運ぶ
今は最後のケビンとヨーコを抱えて飛んでいる
「ねぇ、ナイア？」
どうかしたのだろうか？
「なに？」
「言い忘れてたんだけど、初めてあったときに助けてもらって、そのお礼がまだだったから、今言うね」

「あのとき助けてくれなかったら、私きっとあいつらに食べられてた。ナイアは命の恩人だよ」
／／／／／／／／いや、あのときのことは良のよ。当たり前でしょ？助けるのは
「そうかもしれないけど、私はナイアに感謝してるよ。ありがとう、ナイア」
むう／／／／／／／／／／／／恥ずかしいわこれは・・・・って
「む？」
ふと気づくと背中のケビンの手が胸元に当てられていた
「ケビン？・・・・・」
「もう少しあった方が俺はタイプだぜ？。・・・Bくらいかこれ？」
上付いたら覚悟しな、ケビン。

え、何で言葉遣いが変わっているのかって？・・・・・それは、その・・・みんながその方がいいとかかわいいとか自然だって言うから、さ

『（あれですね・・・こういう人をツンデレって言うんでしょうか？）』

「（何か言ったか、ネロ？）」

『（いいえ、なんでもありません）』

？、なんだろう、凄く不穏当なことを言われた気がする・・・・・・・・・・・・・・・

第六話　【ハイゥエイで脱出？まぁそれでいいか】（後書き）

今回の話は読み返してみて見るとすごく残念な感じです

ちなみにここでひとつぶっちゃけると、このバイオ編はあくまでも主人公に力とつけて武器を大量所持させるための話のつもりで書いたんです（笑

なぜ素直にはじめからなのはの世界に飛ばなかったのかというといきなりなのはの世界に飛んで銃器集めるのは無理だろうって理由です（ヲイ

ですのでバイオ編はもう少しで終わります。それはもう速攻で

そしてその後になのは世界で重火器（↑誤字にあらず）をぶっ放して原作ブレイクさせる所存でございます

ですので本格的な無双はもうしばらくお待ちを・・・・・・・

第七話　【うーん、ニュクスってどうやって倒すんだったっけ？】（前書き）

投下です。どうぞ

第七話　【うーん、ニュクスってどうやって倒すんだったっけ？】

どうも、ナイアです。皆殺しにされた哀れな傘の兵隊さんのトラックから大量の武器を入手したんだけど、その後肉まんじゅうに襲われてます

「ちょっとこれ、気持ち悪すぎよこれ！」（カシャッカシャッカシャッ！）

いや、そこは同感だが、写真取ってないで早く車に乗ってほしいんだけど、アリッサさん？

「あと三枚くらい撮らせて！」

いやいや、そんなことよりも速く逃げた方が良いよ？

さっき絞めて口を割らせた生き残りのアンブレラの兵隊の話が本当ならこの町後十五分後くらいで

戦術核で衛星軌道までブッ飛ばされるんだよ？

そんな気持ち悪いの撮ってないで速く逃げた方が良いと思うよ？

俺だって核兵器はさすがに防御できるか分からないし・・・・・

「くっ・・・分かったわ、ここらへんであきらめとくわ」

うん、それでいい。後は逃げるだけだね。・・・・・そんなに悔しそうな顔するなって

あ、そういえば運転は誰がやるんだ？

「私がやろう」

おお、マークか。喋ったの見たの久しぶりだよ。ほとんど空気化してたし

「・・・・ほっといてくれ」

マークが運転席に座り、助手席には念のためにショットガンとグレネードランチャー（ＩＮ　火炎弾）を

置いておく

それ以外のみんなはトラックの荷台に載る。ちなみに殿は俺

「みんなのったよ、ナイアも早く！」

うむ、ちょっと待ってね。今あの肉まんじゅうを足止めするから

「ネロ、あいつの足場を崩して足止めするよ」

『了解です。マスター』

いくぜ、相棒！

「【空を穿て】【屠龍一閃】」

黒い炎を纏った刀身から鉄を切り裂く高熱が舞い起き、ニュクス本体と足場を切り裂く

ハイゥエイは切断したしニクスは消滅していないが、輪切りにはなった。まぁしばらくは動けないだろ

う

「よっと」

トラックに乗り込み、発進。残り時間はまだ十分ある。原作とは違ってかなり余裕がある脱出だ。これ

なら間違っても爆発に巻き込まれることはないだろう

閑話休題

ここはラクーンから遠く離れた山道。ここからはあの町がよく見える。

明け方の太陽の光で紅く染まって見えるこの町は、まるで犠牲者の流した血の色のようだった。

「うん、これで一件落着って訳じゃないけど当面の危機はなくなったね」

ああ、疲れた。こんな世界に送るなんて、あの神様も何考えてるんだか・・・・・・・

でもまぁ、これでみんなを無事助け出すことが出来た。これで良しとするか。・・・・・さて、後は

「ナイア、もしかして行っちまうのか？」

「ああ、そうするつもりだ」

ウエスカーとガチンコとかマジ勘弁だしな

「結局取材させない気なの？」

ああ、悪いなアリッサ。また何時かあったらにしてくれ

「がんばってね、ナイア」

シンディ、君の優しさは俺の心にしみたよ。いつまでもそのままでいてくれ

「・・・・・・・これをやる、取っておけ」

デイビッド、煙草ありがとう。大事に吸うよ。それにこのジッポもらっていいのか？・・・・・ありがとうな

「これアンタにやるよ。幸運のお守りだ」

ジム、地下鉄では大活躍だったな。アサルトライフルなんて早々お目にかかれない武装だよ。

あれはまだカバンの中に入ってるよ。

「ありがとう、君のおかげでみんな生き残ることが出来た」

いや、みんなだけでも脱出できるさ。俺はただ脱出する時間を早めただけだよジョージ

「本当に助かった、これでまた女房と息子に会える」

マーク、奥さんと子供にもよろしくな

「あの、その、私も・・・連れて行ってはくれないのかな？」

それは無理だ。俺が行く所は人が生きて行くには少し辛いと思うから。・・・せめて、この世界で幸せになってくれ。ヨーコ

「うん、ごめんね。変なこと言って」

いやいいさ、その代わりといったらあれだけどみんなで集合写真でも撮ろうぜ

「おお、いいねぇ！デイビッド、お前も来いよ！」

「タイマー設定にしたわ。さあ早く並びなさい！」

「「「「また何時か会おう（ね）ぜ！！」」」」

ピピピッ・・・カシャッ

シャッターの落ちる音がした

このとき、茂みの中から突き出た銃口に気づけなかったことを俺は一生後悔すると思う

第七話　【うーん、ニュクスってどうやって倒すんだったっけ？】（後書き）

この小説をお気に入りにしてくれた方々、どうもありがとうございます

それと、無双の方ですがあと少し、あと少しでバイオ編が終わるんでもう少しお待ちを

第八話　【慟哭／復讐　そしてアンブレラ崩壊】（前書き）

投下です
お目汚しですが、どうぞ

第八話　【慟哭／復讐　そしてアンブレラ崩壊】

気づいたときには、もう遅かった
響く複数の銃声、巻き起こる悲鳴、倒れる俺の仲間達、流れる命、
そして俺の胸に走る激痛
撃たれた。と思ったときには、もう倒れていた

襲撃者は、俺たちを引きずって一カ所に集めると、油をかけて火を付けた。証拠は残さない気だろうか？

『・・・』

ん？何か聞こえる？

『こちらハンター０９！脱出者の処分、完了！作戦終了』

『了解、今ヘリを送った。それに搭乗し、帰還せよ』

『了解。通信を終了する』

『ＨＱ了解』

通信をしている兵士の1人の背中を見ると、そこには傘を模したエンブレムがあった
「アン、ブレ・・・ラ」
ああ、こいつら、コイツらがみんなを撃ったのか・・・・熱い、体が焼ける
何で、何でだろう。みんなはただ生きたいからあの町を脱出したのに、ただ居ると不味いから口を封じられたのだろうか？
「フザケルナ・・・・」
そんな理由で、何故死ななければならなかったのか・・・・・・・
「恨めしい・・・・・」
ああ、恨むぞ。自分の地位と権力のため、自らの失敗をうやむやにするためにみんなを殺した貴様らを・・・・・
もう傷は治った。まだ炎の中にいるけど火傷はしていない。いや、……するはずが無い

「【術式選択】【総力身体強化、開始】」

己が内に存在する魔術回路をフル稼働させ、筋肉を、筋を、内臓を、脳を、骨格を、体全てを限界まで強化する

このときは知らなかったが私の両目は淀んだ紫色に染まり瞳孔は爬虫類のそれのように縦長になっていた
「あああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」
立ち上がり目の前の滅ぼすべき者達へと肉薄する。さあ、復讐の始まりだ。せいぜい不様に逃げまどい、命乞いをしろ
ゆっくりと時間をかけて解体してやる
「【術式選択】【重力操作術式】【重力】【我が指揮下へ】」
「潰れて果てろ！」

（アンブレラ社、最高幹部会議）

アンブレラでもごく一部の者しか入ることの出来ないその一室で、ジェイムズ・マーカス、アルバート・ウエスカーの2人が、とある部隊の無線通信記録を食い入るように聞いていた

『何なんだ、一体なんだっていうんだアレは！？焼却したはずなのに！撃ったはずなのに！』

『おい、後ろだ！』

『なっ、ぐあああああ！』
『ジョニー！この野郎！よくも！！』
『こ、こいつ早すぎるぞ！？追いつけない！！』
『こんなB．O．Wは資料になかったぞ？！どういう事だ！？』
『散開！各自反撃にうつ　ぐぎゃっ』
『大尉！』
『HQ、HQ！小隊がこのままだと全滅する！応援を！助けてくれ！』
『こちらHQ、どうした？何があった？階級と所属部隊を述べ、状況を説明しろ？！』
『俺はハンター小隊所属のラッシュ・ナカタ少尉だ！』
『少尉？大尉は、隊長はどうした？！』
『アンノウンに殺された！このままでは全滅する！応援を頼みたい！』
『応援要請を受託。状況は極めて危険と判断。近隣の部隊、並びに帰還中の部隊は迅速にハンター小隊の救出、並びにアンノウンの殲滅に当たれ！』

・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

・・・・・

・・

・

『こちらHQ、ハンター小隊の救出、並びにアンノウンの殲滅は終わったか？』
『・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・』

『おい！どうした！？応答しろ！０６、０２、０１、０３、０４、０５、０７、０８、０９！答えろ！答えるん「皆殺しだよ」だ、誰だ？！』
『あんた達がアンノウンって呼んでる者だ。悪いけど部隊員は全部八つ裂きにした』
『なっ！貴様、よくも！！』
『脱出してきた民間人を口封じのために殺すあんた達が言える事じゃないだろ』
『・・・・・それは』
『まあいい。もう過ぎたことだし。それよりも、伝言頼めるか？』
『！！・・・・・聞こう』
『そう。じゃあ行くよ。ちゃんと本社のお偉いさんに伝えてくれよ』
『わかった』
『”この礼はたっぷりと返させてもらう。人の形をしたまま死ねると思うなよ？”・・・以上。』
『ザザッ　プツン』

（一年後、マーカス邸の書斎）

みんなが死んでから一年間、俺はずっとアンブレラに対してテロ攻撃と暗殺を行っていた

何とか最高幹部を含む全社員を補足して会社ごと分子レベルにまで分解したのが五日目の午後、
そして今日まで生き残っている人類はゼロ

色々と頑張ってはみたものの、結局世界はＴ－ウイルスに冒され、地球は死体の星になってしまった・・・・・

人を殺す罪悪感に耐えられずに壊れてしまった心を持ち、体には無数の傷跡を背負い、人を殺す技術を覚え・・・

そんな無様な格好だけど、あいつらを何とか皆殺しにした

全く持って無様だ。皆殺しにすると誓ったのに、その前に心が人を殺すことに罪悪感を覚えるなんて

それに・・・この胸の違和感

「ずっと胸がすーすーする・・・もうあいつらは皆殺しにしたのに、何でだろう？」

顔を隠すために付けていたガスマスクをカバンに仕舞う。もう使わないだろうが一年間ずっと付けていた物で愛着がある

「おかしいな、復讐は終わったのにちっとも嬉しくない。それどころか胸の痛みが酷くなってる・・・。」

まぁ、いいか。また心のどこかが壊れたんだろう

「時は記憶を風化させる。悲しいことも、嬉しいことも、いずれは消えて無くなる」

まだあの女の子に会う前にそんな言葉を聞いたような気がする。アニメだったか小説だったか・・・・・・

この記憶だけはなくしたくない、忘れたくない。

「これで俺の復讐は終わった。いくぞ、ネロ。次の世界に・・・・・・」

『・・・了解、マスター』

え、言葉遣いが元に戻っているって？・・・・・・やっぱり、この言葉遣いの方が気が楽でね。まぁ、これからは時と場合によって使い分けるさ

ああ、思い返してみると、この世界に来て始めの頃が一番楽しかったな・・・

そう思いながら、デビッドのジッポでラッキーストライクに火を灯し、紫煙を肺一杯に吸い込む。

世界と世界を渡るための穴が開けられる。

「さて、行こうか。」

一瞬、室内が黒い霧で満ちる

その次の瞬間には彼の姿は霞のように消え、魔法使いが立っていた

場所には火のついた煙草が転がっていた。

俺が助けたいと思った奴は助ける、それ以外は知らない。それがここ一年で見出した俺の過ごし方・・・

自分勝手で最低な理由だと自分でも思うけど・・・・・・

それでも、これで誰かを助けるって事はできるんだ、あながち間違いって事ではないんじゃないかって思う

第八話　【慟哭／復讐　そしてアンブレラ崩壊】（後書き）

バイオ編ラストです。次回からなのはの世界で主人公が早速血の雨を降らせます

（いるのかどうかはわかりませんが）乞うご期待！

第九話【魔法も銃も使い手しだいだと思うんだけど・・・・】（前書き）

投下です

宣言どおりになりました・・・よね？

第九話【魔法も銃も使い手しだいだと思うんだけど・・・・】

俺、ナイアことナイアトース・トホテップは困っていた

「・・・・・・・・・・・・・・・ここ、何処だ？」

ここに転移したらいきなり魔力弾をしこたまブチ込まれ、訳も分からずガバメントで反撃しながら周りを探索しているが・・・

「そこまでだ！おとなしく質量兵器をこちらに・・・（パンパンパンッ！）ぐぁぁぁ、手が・・・足があぁぁ！」

また出てきた。そっちは問答無用で殺傷設定の魔法撃ってくるくせにおとなしく武器手放せとかうざったいんだよお前らってん？質量兵器？殺傷設定？

「・・・・・・ネロ、今何時だ？」

『”ミッドチルダ”標準時間で午前三時十五分二八秒です。マスター』

ミッド？！やっぱりここリリなの世界か！つまりあれだな、魔砲少女のテリトリーかここ！そういえばさっき粗挽き肉に変えてやったヤツも

管理局の機密施設とか何とか言ってたな・・・

「血、血が・・・こんなに沢山・・・だ、誰か！止血キットを持ってきてくれ！」

あー、あれか。この施設もしかして戦闘機人か何かの施設か？丁度目の前に人がいるし聞いてみるか

「だ、誰か「おい、お前」ひ、ひぃ！」

「ここで何の研究をしていた？素直に吐きな。」

「そ、それは機密だ！言ったら俺が消される！」

なんだよ、俺が何もしないでただ聞いてるだけだってのに。仕方がない、少し啼いてもらうとしよう

「誰もテメェの今後の身の上とかは聞いてねぇンだよ、今尻穴に鉛玉ブチ込まれたくなかったらさっさと吐きな！良い子だから」

言いながらコルトを仕舞い、Ｍ－５００を眉間にねじ込みつつハンマーを起こす。カチリ、と金属のかみ合う音がして弾倉が一発分回転する

「し、質量兵器の違法使用だぞ貴様！」

・・・どうやらまだ自分の立場が分かっていないようだ

「ふーん・・・・・・そう」

誰かコイツの代わりに弾を喰らってくれるヤツを探すために周りを見渡すとそいつの隣で足から血を流している女性研究員を見つけた

・・・この女で良いか

銃口をその女性の右足首にポイントして一発引き金を絞る。放たれ

た弾丸は女性の足首から下を千切り飛ばし、そのまま床へめり込んだ

「っあ、あああぁぁぁぁ！いた、痛いいいいい！足、私の足ー！」

・・・キャーキャー五月蠅いから頭にも一発撃ち込んで黙らせる

脳漿が辺りに飛び散り、ピンク色の花が咲いている。脇の男を見ると目が虚ろでブツブツと独り言を吐いていた。コレなら素直に話すだろう。（・・・・・・若干やりすぎたかと思ったが）

「もう一度聞くぞ、ここは何の研究所だ？」

その後は所属、責任者の名前など知っている全てのことを吐かせた後に心臓を引きずり出して殺した。自分の心臓を見る気分はどうなのかは

知らないが、まぁ研究されていた物を聞いたら誰でもそうしたくなるさ

「人体に対する薬物投与、並びに機械化による戦闘力の強化、か・・・胸くそ悪い。どっかの製薬会社みたいなことしやがって・・・」

つまりは戦闘機人計画だった。そんなことするよりも、さっさと銃で武装した方が効率良いと思うんだけど・・・

「気に入らねぇな・・・」

・・・ということで、只今俺の脳内裁判所で判決が出た。この研究に関わった者ずべて死刑。上告は却下

とりあえず手始めにここの職員を処理してから研究所の全データを

かっぱらってからこの土地を焼却することにしよう
外付け大容量メモリーを取り出し、ネロに接続してデータを移し替える
「重要機密から職員個人のデータまで全てメモリーに移し替えろ。その間に俺は職員を掃除してくる」
『了解しました、マスター。御武運を』
ＡＫ－４７を左手に、ミニガンを右手に持ち、施設内に隠れている職員を見つけて撃ち殺していく
「赦してくれ！命だけは！　ぎゃあぁぁ！」
俺じゃなくて実験体にして体を弄られて死んでいった人達に謝りな、馬鹿共
「金だったら幾らでも　うぎゃっ！」
金なんぞ世界を旅している俺には無用の長物なんだよ。っていうか、金で助かろうって根性が気に入らない。おっ死ね、クソ袋
「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい・・・ひぎゃっ！？」
それは今口にして良い言葉じゃないぞ。一足先に地獄で待ってる実験体に言いな
「う、うわあああああ！死にたくない！死にたくない！」

「お？」

ロッカーの中から一人、女性が出てきてそのまま俺に体当たりしてきた

「・・・・・・・・・・・・ふん」

見るとその手にはペーパーナイフが握られているが外套に阻まれて俺に刺さることはなかった

「あ、あれ？・・・・・」

信じられない、と言った表情で俺を見る女性

その彼女をハイキックで壁際にはじき飛ばすと銃を二挺ともカバンに仕舞い、その細い首に手をかけ、一気に引き千切った

ぶちぶち　と血管や神経が千切れ、ぼき　と脊髄が音を立てて折れる

千切り取った首を投げ捨てるとネロから念話が届いた

『マスター、全データの移し替え、完了しました』

そうか、こっちも粗方終わったと思うし、そろそろお暇しようか

「ネロ、この施設に自爆装置はあるか？あるなら起動させろ。タイムは二十秒だ」

『了解、自爆装置起動します。半径１．３４０ｍ以内は危険域となりますので速やかに撤収することをおすすめします』

言われるまでもない。空間転移でさっさと脱出だ

「【術式選択】【転移！】」

詠唱した瞬間に光が俺を覆い次の瞬間には危険域から離れていた

目の前にあるのは先ほど俺が死を振りまいた研究所。それが轟音とともに光に飲み込まれる

「コイツは俺の奢りだ。とっときな」

『マ、マスター！？それは！？』

無反動砲に装填された禍々しい紅い弾頭、その名もデイビークロケット　どこぞの酔狂な馬鹿が作った個人携行型の核弾頭

引き金を引くと核弾頭が白い煙を吐き出しながら廃墟となった研究所へ飛翔していく

と、後ろから声がした

「管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ！そこの君、抵抗は無意味だ、大人しくするんだ！」

「え？・・・・」

・・・・・何でこんな所に居るんだよ。お前さんは

ずどおおぉぉぉぉぉぉーーーーーん！

その背後で、キノコ雲が上がった

施設内部に直接撃ち込んだし、距離は離れてるし、ここは風上だから放射線は何とかなるか？いや、でもとりあえず
ここから撤収した方が良いと言っておくか

「了解（アイサー）、お巡り。あー、ところで執務官殿？分かっていると思うけどアレ、核爆発だから
さっさとここからケツ捲った方が良いぞ、被爆したくなかったらな」

俺もついてこいって言われたけどどうしよう。・・・・・・・・・・・・一応付いていった方が良いかな。手配書回されたら厄介だし

と、その後連行されたのは艦船アースラの取調室　目の前には緑髪の女性と黒髪の少年が俺を問いつめている

「もう一度聞きます。貴方のお名前を教えてください。これは貴方のためでもあるんですよ？裁判の際に名前が分からないというのはこれだけで裁判官に対する印象が悪くなります」

下手な意地は張るな、ってか？・・・・・糞ったれ、そのくだらん法律のことなど知った事じゃない。俺は自分の主義に沿って行動している
だけだ

「・・・・・・・・・・・」

「だんまりですか。貴方にはS級質量兵器の使用、並びに殺人の疑惑がかかって居るんです。何か話してくれなければ貴方は不利になる

ばかりですよ？」

いい加減頭に来た。何がってその恩着せがましい物言いと、自分の価値観を他人に押しつけようとするその傲慢さに

・・・と、いうことで、少し怖い思いしてもらうか

「・・・・・俺にはこの世で我慢ならん物が２つある。１つは風味が飛んだ煙草、そして１つは自分の価値観を人に押しつけて強制的に他人を
強制的に幸せにしようとする偽善者だ。・・・次に先ほどのような臭い言葉を吐いたら貴様の額に直径９？の穴を開けてやるから覚悟しろ」

カバンからグロック１８Ｃを取り出しセレクターをフルオートに変更しながらリンディ艦長に銃口を向ける

まったく馬鹿だよな、このカバンを持たせたままにするんだから。これじゃあ皆殺しにしてくれと言っているような物だ

「き、君！何を考えている！？これ以上罪を増やすつもりか？！」

五月蠅いぞエロノ。・・・足なら死ぬこともないだろう。コレでも喰らって黙ってくれ

「それをこちらにわた、ぐうううぅぅっ！」

両足に二発ずつ銃弾を撃ち込み、その後照準をリンディ艦長に向け直すと若干早口で黙らせた

「コイツの弾はお前の魔法よりも足が速いぜ。無駄だ、やめろ」

とりあえず、リンディ艦長に俺の記憶を見せてやるか。”俺が少しずつ壊れていく、一年間の記憶”を・・・・・

（リンディハラオウン）
クロノが撃たれてしまった。やはり彼女のカバンには武器があったらしい。先ほど念話で武装隊を呼ぼうとしたが、それも封じられたせめてクロノだけでも医療班に見せたい所だが・・・

「この子を下がらせて良いかしら？出血が酷いわ」

すると彼女は嘲るように私を見て

「好きにしな」

といった。早速医療班を呼ぶと彼らは室内の異様な光景に目をむき彼女のことをしきりに気にしながらクロノを担架に乗せて運んでいった

「お前ら魔導士達の弱点だな」

どういう事だろうか？何が弱点だというのだろうか？

「お前達は非殺傷設定に慣れているおかげで血を見る機会がない。

だからあの程度の怪我でぎゃーぴー騒ぐ。全く、見ていて虫唾が走るぞ、
あれくらいなら放っておいてもしばらくは平気だぞ？大きな血管には当たってないみたいだし」

「・・・詳しいのね」

銃で撃たれた人の状態を見ただけで把握するなんて、私たち管理局員では無理だと思う。何しろ私自身銃を見る機会さえほとんど無いのだから
撃たれた人を見た事なんて今日が初めて
放っておいても半日は平気、とは見慣れている人でなければ下せない判断
ただ、それが自分の息子だというのが頭に来るが、ここで癇癪を起こしても仕方がない。話を進めることにしましょう

「まぁね。人と人だった物は撃ち殺し慣れてるし撃たれたこともあるからな」

ッ！！他にも人を撃ってあまつさえ殺しているの？！それに人だった物って一体・・・考えても分からないし、聞いてみましょう

「人だった物って言うのは一体何なの？」

「ああ、それは今から俺の記憶を見せるからそこから疑問を解いていけ」

「どういこと？説明し・・・て・・・・・・・」

不味い、意識が遠のい・・・て・・・い・・・・・・く・・・・・・・・・

これ・・・は？記憶？・・・・あの子の？・・・・・・

「お・・・・き・・・・・・おき・・・・ろ・・・・」

何だろう、誰かに呼ばれているような気がする

「お・・・・おい・・・・・き・・・・」

クロノかしら？・・・・あれ、そういえば今日は何日だったかしら？

「いつまで寝てるんだよお前は、いい加減目を覚ませ！！」

「きゃっ！」

そ、そうだったわ。私は彼女の記憶を見たんだわ

「ッ！！！ぐッ！」

こみ上げてきた吐き気を懸命にこらえる

彼女の記憶は血で一杯だった。”力”を得る前でも寂しい人生を送ってきていたようだったけど特にひどいのは撃ち殺された彼女の仲間の敵を討つと決めてからその世界で過ごした一年

自分を受け入れてくれた仲間達が目の前で殺されてしまった後の復讐のための一年彼女はこの一年で次々と人を殺していった

そして復讐の途中、罪悪感に襲われて心が欠け落ちてしまった

欠け落ちた場所は倫理観と他人を思いやる気持ち、それは人が無くしてはいけないもの

・・・・・・・・・・・人が人たり得るのに必要なもの

これでは彼女があまりにも哀れすぎる。これ以上彼女に罪を犯させるわけにはいかないしこれ以上人として道を踏み外して欲しくない

彼女にもう一度仲間を作って欲しい。もう一度笑えるようになって欲しい。と私は思った

だから私は

「局に入って私たちと一緒に、貴方流の正義の味方を目指さない？」

と、提案した

「局に入って私たちと一緒に、貴方流の正義の味方を目指さない？」

ビンゴ！　この人の性格上、情に訴えかければ容易く懐に入り込めるだろうとは思っていたがここまで簡単にうまくいくとはね
いやぁ、・・・・・・かなり管理局は無能が多いようだな

・・・今回はその無能のおかげで楽できて良いけど

さて、先ほどの思惑通りに勧誘してきたけどこのまま入局したら俺は良いように使われるだけだし、もしかしたら秘密の実験施設に拉致られて解剖＆ａｍｐ；人体実験フルコースになる可能性が高い
そうなると、研究所から強奪してきた書類を元にして個人的な戦力として雇われた方が良いだろう

さて、交渉開始だ

第九話【魔法も銃も使い手しだいだと思うんだけど・・・・】（後書き）

あっはっはっはっはっ！！・・・やっちまったＺＥ☆
中二全開のオリジナル魔法はともかく、デイビークロケケットは無いわ（笑）

・・・ヤバイ、読者の皆さんに怒られそうで今から震えが

魔法の世界に銃だけでは飽き足らず個人携行型核兵器まで持ち込む自分を
読者様の寛容と慈悲の心でお許しください・・・

それと、ここからはずっとアンチ管理局、管理局＝悪　の構造で行こうと思っておりますので苦手な方はご注意を

そしてどうかこのまま自分を見捨てないでいただけると幸いです・・・

発砲スチロールでした・・・・・

第十話【局員ですが相変わらず魔法は使いませんよ？】（前書き）

なんか色々ダメな感じですが投下です

第十話【局員ですが相変わらず魔法は使いませんよ？】

「スバルー！ナイアー！」

―スバル（脳内お花畑）の大声が廊下に響き渡る

「あー、まったく。どうしてこんな所に・・・」

どうも、訳あって訓練校に放り込まれたナイアです

あの後、トントン拍子で話が進んで、無事（？）に管理局で働くことになって

ゲンヤ・ナカジマの部隊で働いていたんだけど（といっても嘱託扱い）訳あって今は違う部隊にいました

何で過去形なのかというと、今は研修と言うことで訓練校に強制的に放り込まれた。ナカジマ曰く、

「チームワークを身につけてこい。最低でも味方ごと犯罪者を爆弾で吹っ飛ばさなくなるまで！」

「それにお前さんの立ち上げた”アレ”の抗議とかも多い！とりあえず研修ってことでお前さっさと訓練校に行け！」

だそうだ。まったく、はじめの頃に比べたらソフトになったと思うんだが・・・
それにしても、放り込まれた訓練校に行ったらびっくりしたよ。何でこの2人とトリオ組まねぇといけねぇんだ！
「ちょっと、スバル！ナイア！早く来なさい！点呼始まってるわよ！」
・・・はいはい、分かりましたよ。ツンデレ・ランスター君
「ちょっとナイア、今失礼なこと考えなかった？」

ぎくっ！な、何で分かった！？心眼か！？ってごまかさなきゃ！

「い、いや。何でもないぞ」
「・・・ふうん、そう。なら、いいけど」

あぶねぇ・・・

「はぁ、この後は確か射撃のカリキュラムだったか？」
そうなら自前のブローニングをカバンから引っ張り出すけど・・・
ティアナに聞いてみた所、肯定の返事が返ってくる。が、そこで何か嫌なことを思い出したのか顔をしかめながら俺に釘を刺す
「そうよ。って・・・アンタまたあの質量兵器・・・確か機関銃ってのをまた使う気じゃあないでしょうね？
あの後教官にあまり必要以上にグラウンドを荒らすなって小言言われたんだから。やめなさいよ！」
・・・ちっ、ばれたか。仕方がないＡＫ－４７でも使うか
「・・・ちょっと、アンタまさか」
「大丈夫、大丈夫、ブローニングは使わないから」
これなら地面が”そんなに”耕されることはないだろう。

多分

第十話【局員ですが相変わらず魔法は使いませんよ？】（後書き）

へたくそながら今回の話で幾つか伏線を張りました。
・・・といっても、次回明らかになると思いますけど

まぁ、それはともかく、この小説のオリジナル設定の話をここでひとつさせていただきます。

この話の中では管理局はすっごく汚職とか癒着が蔓延していて。やり方によっては法律や待遇をいくらでも無視することができたりします

主人公が武器、兵器を普通に使っているのも色々な人と”お話”したからなんです

そのほかにもいろいろとアンチ管理局的オリジナル設定が後々出てくるかと思いますので（いるかどうかはわかりませんが）お楽しみに

追伸　どうか私を見捨てないでください

第十一話　【まだ使いませんよ？】（前書き）

投下

第十一話　【まだ使いませんよ？】

（ティアナ）
ナイアトース・トホテップ。一体アイツは何者なんだろう
本局から質量兵器の使用が許可されていてほとんど魔法を使う所を見たことがない
驚異的な身体能力を誇りベルカ組を数人まとめてよく分からない格闘術で倒してしまうと言った馬鹿げた近接戦闘力を持ち
スバルの父親であるゲンヤナカジマ三佐の部隊にいたことがあってスバルとは顔なじみ
そのスバルが言うには大型の質量兵器を用いて２．０００ｍ先の車の助手席にいた犯罪者の心臓を一撃で撃ち抜いた
何故か校指定の多目的ジャケットは着ずにいつも上下ミリタリー柄の服装を着用し、いつもどこかしらに武器を隠し持っている
などなど、彼女の物騒な逸話や噂は尽きない

「っていうか犯人殺しちゃダメでしょうに」
というか、スバルの情報は本当のことなのか怪しい。大体、質量兵器で２．０００ｍ先の人間の心臓を狙うなんて無茶だと思う

（最近地球から入ってきたそういう映画でもそこまであり得ない設定は見たこと無いし）

その他にも一人称が”俺”で男みたいな言葉遣いな事と年齢に似合わない様々な知識、整った容姿から一部の男、女訓練生に人気があり、

本人不認定のファンクラブ「ナイアトース・トホテップ様に罵ってもらう会」「ナイアトース・トホテップ様に食べてもらう（性的な意味で）会」

「ナイアトース・トホテップタソに近づく男共を抹殺する会」「ナイアトース・トホテップお姉様と姉妹の誓いを結ぶ会」ａｔｃ．．．

といったおかしなクラブが出来ている。・・・大丈夫なのかしらこの訓練校

それに週五で訓練用のスフィアや外壁を破壊するため、教官からの受けも悪ｙ

どかーーーーん！

「・・・・・・・・・・・・・・はい？」

・・・・・・・・・爆発音？

どうやらグラウンドが爆心地のようである。・・・またナイアがやらかしたわね・・・・・

「アイツは・・・どれだけぶっ壊したら気が済むのよ」

ルームメイトで同じチームだから止めなければならない。それにこ

のままでは私が危険だ。・・・主に私の胃壁とか、成績とかが

（大規模演習場　第二グラウンド）

・・・・・・一体これはどういう状況なのかしら？

「ゴルァ！どうしたァ！？テメェがお望みの鉄火場だ！オラオラどうした、俺の戦い方は通用しねぇんじゃあなかったのかよこの（ピー）野郎！」

ガガガガガガガッ！

「どうしたぁ！このままだとテメェのケツの穴が増えちまうぞ。早く撃ち返してこいよ（検閲削除）！」

ドッドッドッドッ！

「死に腐れ（ピー）がぁぁぁぁ！」

ドカーン！　ドカーン！　ドカーン！

「テメェなんぞ（検閲削除）して（自主規制）を（禁則事項です）して（自主規制）しちまいなぁ！」

ズドーン！　ドカーン！　ずどおおぉぉん！！！

ナイアが鬼みたいな形相で誰かを攻撃している。一体どういった状況だろうか？　っと

「スバル！状況を説明しなさい！　っていうか、今撃たれてるアレは誰よ？」

何だろう、嫌な予感がする

「えーとね、・・・エルボス教官長」

・・・・・ごめんなさいスバル、爆音で聞き取れなかったわ。もう一回言って

「だからぁエルボス教官長だってば！」

「クマーーーーーーーーーーーーーーーーーーー？！」

なんで？！何で教官長がナイアに追われてんのよ？！

「うんとね、ナイアの前で教官長が「質量兵器なんぞ魔法の前には意味を成さない。それを使っているナイア訓練生は今すぐやめるべきだ。

そのような戦闘スタイルは実際の現場では通用しない」とかなんとかって言ったらナイアがキレてあんな事を・・・」

エルボス・ルイス教官長。”長”とついていることから分かることであるが、この人はこの訓練校の教官を纏めている人物で私たち訓練生から比べると雲の上のような人物

ついでに付け加えるなら重度の魔法絶対主義者で魔法が使えない人を人類的に劣っていると真面目に話す差別主義者でもある
正直言って私も近づきたくない人物だけど、これは・・・・・・・・・・いくらなんでも導火線短すぎじゃない、あの子？
「ナイア様ー！」
「ああ、なんて凛々しいお姿・・・お姉様ー！」
「ブッ殺せー！ナイアタソー」
「オール・ハイール・ナイア！　オール・ハイール・ハイール・ナイア！　オール・ハイール・ナイア！」
「俺たちも叩いてください、ナイア様あぁぁぁぁ！」
「私を食べてくださーい！」
・・・・・なんだか場が混沌としてきたわね。っていうか何よ、お姉様って？
スバルはスバルでしきりにナイアの武器を見ては騒いでいる。何でかしら？
「ティア！ティア！見てよあれ！パトリオットだよあれ！　ああ！カラシニコフまである！」
「いや、そういわれても分からないから。」
なによパトリオットって？
「すね～くい～た～！！」
「うっさい！バカスバル！！」

イイィィィ～ハアァァァァ～！！この戦場は地獄だぜぇ！！・・・・・・はっ！！今何処からか電波が　って電波って何かしら？

「スバル知ってる？」
「知らな～い」

「ちょろちょろ逃げ回るんじゃねえ、よ！」

ズドン！

「わー、ティアー、スパス12だよー。すごいねー教官長あっちの林まで吹っ飛んで行っちゃったよ。」
ちょっと！なにやってんのよあのバカ！バリアジャケット着用してない教官長に零距離で撃つなんて！
死んじゃうかもしれないでしょ？！
「いやー、多分ゴム弾だから骨折くらいだと思うよー？血出てなかったし」

ってそれでも十分やばいわよ！バカスバル！
「逃がすかこのクソ野郎！まだお仕置きは終わっちゃいねぇぞ！」
「ナイアが追いかけて行っちゃったね。それとティア、間違っても止めに行かない方が良いよ。」
分かってるわよそれくらい。あたしだって藪をつついて鬼を出すような真似したくないし

第十一話　【まだ使いませんよ？】（後書き）

相変わらず銃だけです。魔法は使いません（藁

とりあえず、今回の話に出てきて速攻で主人公に凹られてた教官長なる人物ですが、この小説のオリ設定としては時空管理局には差別主義者やら管理局至上主義者が結構いて、調子に乗って色々と悪いことをしていたりしている　という設定にしました。
正直、管理局はもう寿命って言う風に書いたつもりです
これが後々主人公の身の振り方を決める伏線になるのでできるだけ詳しく書いていこうと思っています

最後に、自分の駄文をお気に入りに追加してくださったユーザーの方々と読んでくださった全ての方に感謝を

以上、発砲スチロールでした

第十二話【魔法はっかい（ｒｙ】（前書き）

最新話投下です

第十二話【魔法はっかい（ｒｙ】

その後教官長で散々遊んだナイアが満面の笑顔を浮かべながら林から出てきた。（衣服の所々が紅かったのが印象的）

あまり騒ぎを起こさないように注意した後、教官長にどれくらいの怪我を負わせたか聞いたら

「そんなに酷くはないさ。まぁ、一個だけでもモノは”勃つ”だろ。・・・・・・何がとは言わんが」

といっていた。周りの野次馬の中で男子訓練生が”ソコ”を隠して青ざめた顔をしている

「「ナイアトース・トホテップ様！俺たちも去勢してください！」」

・・・・・いや、一部例外がいたわね。ついて行けないわ

「ナイア、食堂行くわよ。」

そろそろ昼食の時間のはず。とりあえず食堂に逃げ込みましょう。このままじゃすごいことになりそうだし・・・

まったく・・・ここの教官は学習能力がないのか？前にも一人教官を〆たばっかりだってのにどうしてそう突っかかってくるのかね

「ナイア、注文しに行くわよ」

ナイアをつれて食堂に入るとそこそこ混み合っていた。もう少ししたら実技組が来るだろうし先に注文した方が良いと思い
ナイアとともにカウンターに向かう

「ティアナにナイアじゃないか、おや？スバルはどうしたんだい？いつもはアンタらの後ろにいるのに姿が見えないね？」

「アイツは少し遅れてくるってよ。気にしなくてもいいさ」

「そうかい。なら、あの子の好きなスパゲッティー混沌盛りを1皿ストックしとくかい？」

「ああ、そいつは助かる。アイツに飯を横取りされんのはごめんだからな。・・・ああ、２人ともＡセットで頼むよ」

「あいよ。少し待ってな、今持ってくるから」

ははは、本当は食わなくても生命維持活動に問題はないんだがな。人だった頃の名残か三食食わないと腹が空いて何となく不快だったりするんだが・・・・・・

そこはちゃんと空腹を感じなくなるようにしてほしかったな・・・・・

「はい、Ａセット２つお待ち！」

おおう、来たか。ここの飯は結構イケルからな、早くしないとマズい購買のパンを食う羽目になるからな

「先に行って席とっておくぞティアナ」

「ありがと」

さてと、食すとしようか

午後の訓練も終わり、部屋で一服していると米神に青筋を浮かべているティアナとスバルが帰ってきた

「ちょっとナイア、あれほど言ったわよね。訓練で高威力の質量兵器を使うなって」

「んー、ＡＫ（アレ）４７ならまだ良い方だぞ？紅弾頭はもっとやばいし」

「そーだよねー、私もおとーさんに記録映像見せてもらったけど。アレは凄まじかったよねぇ・・・」

あれ、スバル何時の間にそんなの見せてもらったんだよ？ゲンヤからはそんな話聞いてないぞ？

「なによそれ、一体どんな兵器よ？」

ん、なんだい興味あるのかティアナ？

「プルトニウムを使った地球の戦術兵器。炸裂した瞬間の温度は十万度を超え大量の熱線と爆風をまき散らしておまけに人が生きていけない量の放射線をまき散らして向こう何十年間ぺんぺん草も生えなくなる土地が出来上がる愉快なシロ物だけど？」

「アンタ何でそんな気が狂ってるような物使うのよ？！っていうかなに狙って撃ったのよそんな物騒な物！！」

そりゃあ、吹っ飛ばした方が世のため人のためになるような所さ

「あはははは、管理外世界に建設されていて、レアスキル持ちの子供を次々と解剖した後のカエルみたいにしてた違法研究施設だよ一応犠牲になった子供はみんな俺が回復させて社会復帰させて、そんでもって子供達をそんな目にあわせた馬鹿研究者共は全員凹ませ

た後
塀の中に叩き込んで、必要な証拠とかを全部集めた後にこの施設を悪用する戯け者が出ないようにってことで上を頷かせてブチ込んだが？」

心配すんなって吹き飛んだのは研究施設だけだし・・・・・何人かの管理局高官を匿名で告発してやろうかって脅してやったら面白いくらいホイホイと言うこと聞いてくれたから面白かったよなぁ

「どうせその”上”ってのも恐喝か何かで頷かせたんじゃないの？」

おや、鋭いな。流石、執務官を目指すティアナだな

短くなった煙草を灰皿に突っ込み二本目に火を付ける

「・・・・・ぶはーーーー」

吸い込んだ煙を吐き出し脳へニコチンが回る感覚に酔いしれていると、ティアナから苦情が上がる

「良いじゃねえかよ。一応窓開けてんだから・・・・・ティアナも吸うか？」

全くもう、何で非喫煙者ってのは煙をいやがるかね？こんなに旨いのに・・・吸ったら分かるさこの煙草の素晴らしさが

「誰が好きこのんでそんな毒物接種するってのよ！」

左様か・・・・・

その後、スバルから明日の休日一緒に遊ばないかとティアナと一緒に誘われたり、今日使った銃器の分解整備なんかをしている内に消灯時間になったのでその日は早めに眠ることにした

（おまけ）

「♪か～♪ざ～～あ～～な～♪♪」

『何をしているんです？マスター？』

「んー？、ファイブセブンに改造パーツを付けてるんだけど？」

『そのほかにも何挺か改造しているみたいですね』

「デザートイーグルとかＭ－５００とかだな」

『どれも対人用ではありませんね。その二挺は狩猟用のはずですが？』

「ＨＡ☆ＨＡ☆ＨＡ、気にするｎ「うるさい！眠れないでしょう？！」ティ、ティアナ？！悪い！」

第十二話【魔法はっかい（ｒｙ】（後書き）

うーん、今回の話、書いた意味があるのか自分でもわからないぞ（ぇ

あと、次回から少しずつ百合っぽい表現と原作キャラ魔改造が始まります

どうぞお楽しみに

第十三話　【新オリキャラ登場】（前書き）

「あれ、週間アクセス数１０００超えてるぞ？！」とさっき気づいた発砲スチロールです。

いつもこのページを覗いて下さる方々に感謝を投下です

第十三話　【新オリキャラ登場】

（ミッドチルダ東部１２区内　パークロード）

昨日の夜スバルが誘ってくれたのでとりあえずゲンヤの最近の様子をギンガに聞きたくなったから付いてきたんだが・・・

「ギン姉～☆」

「スーバル～♪」

・・・・・なんだか俺とティアナ邪魔っぽくねぇ？

「ナイアもひさしぶりね」

「おう。そっちも相変わらずだなギンガ。所でゲンヤはどうだ？最近腰をやっちまったとか聞いてるけど？」

「・・・それがお父さんったら先生からドクターストップをかけられてるのに執務室にベッドを置いてそれで仕事をしてるの」

・・・何やってんだあのアホは。娘に心配かけんなよ

「じゃあ、今もまだ寝たきりで仕事してんのか・・・今度顔出しとくか？」

場合によっちゃあ行って治療魔術を掛けてやらねえといけねぇか？

「・・・・・出来ればお願いします」

「ははは、了解。近いうちにそっちに行くわ」

と、ティアナに脇腹をつつかれた

「ん？どうした？」

「アンタ、二佐を呼び捨てするなんて何考えてるのよ。厳罰モノよそれ」

ああ、そのこと

「ゲンヤとは飲み仲間だし、平気だぞ」

「なんなのよそれ・・・」

・・・・あの立て籠もり事件、かなり凄かったもんなあ　←どこか遠い目

「ねえねえ、早く行こうよギン姉、ティア、ナイア！」

はいはい・・・元気だなお前さん・・・・・・・

俺はみんなとは別行動を取ってとある店の前に来ていた

さてと、この店が確かたしかデバイスのパーツを売っていｒ「大尉！？大尉でありますか？！」・・・・・・え？

どこかで聞いたことがある声が後ろからした

「ハルチョフ曹長?！何故ここに?！」

人が多い通りでビシリと敬礼する曹長。　　おーい、そこ、見せ物じゃないから。写真取るな馬鹿たれ。肖像権の侵害だぞ?

ハルチョフ・ソルヴォト曹長（陸曹長）は俺がリンディやクロノ坊やに提案して設立した”特殊機動隊０課”の隊員で
中規模犯罪組織に所属していた所を俺がスカウトした人物で戦闘力、指揮能力どちらも平均を大きく上回る
更にある程度裏に顔が利くから普通の調べ方では分からない情報を持ってくるなど、かなり使える人物だ

ただ、見た目はまんまマフィアの幹部で顔面に付いた幾つかの傷跡が更に迫力を出している―（正直俺も初めて見たときはビビった）
・・・・・・・・・・正直、カップルや家族連れが多いこの通りにいるのは場違いな人物である
どっちかっていうとイエローフラッグにいたほうが自然な感じの面である・・・つーか、何しに来たんだ?

「我が隊で使用する弾丸の生産スピードを上げるため、スワノフ二等兵から提案された銃弾製造器の開発のためであります」

ああ、なるほど曹長もあの店に用があるのか

「それはいい。私も少しばかりあの店に用があるんだ。いくぞ曹長」

「はっ、お供いたします！」

曹長とともに店へ入っていき、頑固そうな店主にメモ紙を渡す

「「これに書かれているパーツを全て集めてくれ」」

メモを受け取った店主は少し待つように言ってから店の奥へと消えていった

2人は店主がパーツを持ってくるまで煙草を吸いながら最近の部隊での出来事を話していた

「まったく、我ながらよくもまぁこんなに買い込んだものだな」

「私も大尉のことを言えませんが、一体何をなさるおつもりです、大尉？」

2人揃って大量のパーツを買い込み店を出る

「ああ、このカバンのように武器や弾薬を収納する収納専用デバイスやサプレッサーを作ってそっちに持っていこうかと思ってな」

「なるほど、そうでしたか」

まぁ、完成したら性能テストを頼むからその時はよろしく

「あ、そういえば」

と、そこで彼に渡すものがあったことに気が付きポケットを探る

えーと、確かここに入れたはず・・・あった

見つけたメモ用紙を彼に差し出す

「弾薬の材料が必要になったらミッドチルダ貸金庫に行け。地上本

部の石頭共を説得するよりも楽に材料が手に入る・・・・・・あ、このメモに金庫の番号と暗証番号書いてあるから
扱いには注意しろよ？・・・後、金庫の中身にもな」

曹長は差し出されたメモを見ると目を丸くする

「大尉、こんなに大量の無煙火薬や弾頭をどこから？」

「ああ、第９８管理外世界からミッドに密輸してきた」

「ちょっ、大尉？！」

「石頭共がまとまった量の物資をよこさないからな。仕方がないのさ・・・・・・・・・・・って、ん？」

と、なにやら後ろから視線を感じたので振り返ると

「・・・オイ、テメェら何してる？」

青ワンコとツンデレとドリル姉がじーっとこちらを見つめていた

「曹長・・・少しつきあってもらうぞ」

「了解です。・・・彼女たちは一体？」

「訓練校のルームメイトとその姉だ」

ギンガとスバルが走ってこっちにやってくる。何が言いたいのかはその目を見れば十分分かる。曹長のことを聞きたくて仕方がないといった目をしている

「はあ・・・そうですか。大尉も色々と大変ですね」

「・・・分かってくれるか曹長」

気遣ってくれる良い部下に思わず泣きそうになった俺であった

「なぁーんだ、ナイアの部下の人だったんだ。恋人かと思っちゃったよ私」

「てっきりナイアさんの保護者の方かと思いました」

ははは、残念だったねギンガ。それとスバル？俺は元男で女の子が好きなんだよ？決してモーホーではないぞ

「ちょっとナイア、さっきからハルチョフさんが大尉、大尉って言ってるけどアンタ訓練校に入る前はどれくらいの地位にいたの？」

ん？一尉ですが何か？

「何でそんな高官が訓練校にいるのよ？」

「いや、遊撃隊の犯人を無力化するための方法が、乱暴だって人権何とか委員会とか弁護士何とか委員会が抗議してきてね。で、隊長である俺が悪いってことになって俺が訓練校にブチ込まれた。なんでも、一回犯人の無力化方法を学んで来いってさ」

と、そこでふとティアナが俺のことをジト目でにらむ。・・・・・なんだよ？

「まさか、アンタ、犯人撃ったの？」

「そんなには殺してねえぞ」

だからそんなに凄い目で睨むな。怖ぇから

と睨んでいたティアナの視線が和らぐと諦めたような顔をしている

「はぁ・・・アンタにそんなこと言っても意味ないか」

そりゃどうも

「ねえねえナイア。ハルチョフさんと同じ部隊だったんだよね？！どんな部隊なの？っていうか何て名前の部隊なの？」

「さっき言っただろ！遊撃隊だよ！それともニュースで良く聞く名前に言い換えて”ヴィソトニキ”って言ったら分かるか？」

「「「「えええぇぇぇぇぇぇぇぇーーーー！！！！”あの”ヴィソトニキ？！」」」」

ナカジマ姉妹はともかくティアナ、お前まで・・・いや、仕方ないか？

ニュースでは俺たちヴィソトニキの活動がかなり否定的に伝えられているからなぁ

曰く、容疑者の心身の安全を全く考慮していない

曰く、容疑者の基本的人権を無視している

曰く、質量兵器を大々的に使用している

曰く、実際は局の特殊部隊で局にとって邪魔な人物や組織の掃除を行っている外道な特殊部隊である

っていうか、ちょいまち、最後のはあり得ねぇだろう最後のは！？ちょっと曹長も顔をしかめてるし

これでもスペズナズやＳＷＡＴよか温厚だと自負してるんだが・・・壁越しに一５０口径（１２．７ｍｍ）ぶち込んだり問答無用に鉛のシャワー浴びせたりしてないし

「大尉、辛いものですな、面と向かってあんなリアクションをされるのは・・・」

「気にするな、気にしたら負けだと思え。でないとこれからこの部隊の仕事が苦痛になるぞ」

「そうですな・・・・・確かに、気にしたら負けな気がします」

「「はぁ・・・・・・・・・」」

ため息がユニゾンした

（ティアナ）

「「「えええぇぇぇぇぇぇぇぇーーーー！！！”あの”ヴィソトニキ？！」」」

じ、冗談じゃないわ、あの容赦のなさとか銃を使った無力化法とか

を見てまさかとは思ったけど本当にあの狂犬部隊の一員だなんて！
たまたま他の訓練生から聞いた話だと
人質を抱えている犯人の頭を吹き飛ばして人質になっていた女性が
それを見て精神疾患を患ったとか
抵抗した犯人を容赦なく皆殺しにて逃走する犯罪組織のボスも射殺
して、しまいには禁止薬物が満載された小型艦船を都市上空で撃墜
した
なんて話を聞いたけど本当なのかしら。本当ならばどうにかして止
めさせないと！！
「ナイア、ハルチョフさん、少しお話が」
アレがもし本当なら大変なことだ。あの路地で話してみよう。スバ
ルとギンガさんが付いてきているけど、まぁそれでも良い。
「あんたにちょっと聞きたいことがあるんだけど、良いかしら？ハ
ルチョフさんも？」
「ん？どうした？」
ナイアはケロッとした顔で付いてきた。そこで私の自制心は限界を
超えた
思いっきりナイアの顔面に平手打ちをして
「ふざけんじゃないわよ！！！アンタは間違ってる！！」

と叫んでいた

痛ってぇ・・・いきなり引っぱたきやがって・・・そんなに気に入らないのか、俺が？

「・・・で、三人とも、そんなに俺たちのやっていることが間違っているか？」

「「「そう（よ）（だよ）！」」」

「・・・じゃあティアナ、何処が間違っているか行ってみな」

やっぱりか・・・ここの世界ではどんな状況でも犯人を傷つけるのは悪なのか
ああ、これも非殺傷設定に頼りすぎた弊害だな・・・・・
「じゃあ聞くけど、人質を抱えていた犯人を殺したり、戦意を失って逃走した人間を後ろから撃ったって本当？」
ああ、あの事件か・・・って、一応極秘扱いのはずだよねその件？！なんでティアナが知ってんだ？！
「訓練校では有名な話よ。あたしも時々話す奴から聞いたわ」
・・・・・水漏れが過ぎるぞ、リンディ総務統括官
頼むからもう少し人を疑うって事をしてくれよ・・・・・・・・・
「ああ、そうだ」
まぁ知られてるのなら素直に言った方が良いか
っと、ん？更にティアナの態度が堅くなったような・・・・・
「認めないわよそんなの！」
うぇい？！いきなり何？！
「アンタそれだけの事をしでかしておいて、何でそんな風にヘラヘラしてるの？！」
「あんなに人を殺して、それで、なんで！アンタが普通に生活して

んの？！」

「どうやらアンタはそれで人を助けた気でいるけど、やっていることはただの人殺しよ！！この、犯罪者！」

キツいなあ・・・人それぞれ考え方は変わらないって思って疑わない目だな、アレ。　　なんだかあの目を見たら苛ついてきたな・・・

少しきつめに言って黙らせるか。それで別に三人との関係が悪くなったとしても問題は無いだろう

「お「貴様！今の言葉を訂正しろ！」曹長、何を？！」

顔を真っ赤にした曹長がティアナを殴り倒した

そのせいでこっちはきつめの言葉を言う気が失せたが、一体曹長は何を？

「貴様・・・「・・・あたしはティアナ・ランスターよ。貴様じゃない」・・・ではランスター、お前に聞くことがある」

おーおー、曹長にガン付けてるよティアナが。随分肝が据わってるなオイ

っていうか曹長は一体何を聞く気でい「大尉の記憶を見たのか？」ってオイ！？それはそいつらには見せられるわけないだろ？！あんな地獄？！

「し、知らないわ。それが何よ？今はそんなこと関係な「ある！大尉の体験してこられた記憶を見れば、それが分かる！」・・・」

「大尉！彼女達に大尉の記憶を見せてやってください！彼女達は何も知らない、知らなさすぎる！大尉に対してあの様なことを言うのはもう
私も我慢の限界です！」

「大尉に、大尉に手を挙げる所までは何とか我慢できた！ですが、大尉の御心を知りもせずにただ大尉を人殺しだ、犯罪者だと言うのは私は
聞き捨てなりません！」

「お願いします、どうか大尉の記憶で、不名誉な呼び名を雪いでください！これは隊全体の汚辱でもあるのです！どうか、ご決断を！」

いや、だが・・・アレを見せるのか・・・三人が耐えられるとは思えないが・・・

「曹長、彼女達が耐えられるとは思え「見せて、アンタの記憶」なっ！ティアナ？！」

「わ、私も、同じルームメイトなんだし、見る権利があると思う！」

「私も、元は同じ部隊にいたんだから見る権利は十分あるはずです！」

スバル、ギンガまで・・・「大尉、お願いします・・・・」っ！！
ああもう！

「後悔するぞ！それでも良いのか？！」

「「「後悔なんてしない（わよ）（よ）（わ）！」」」

「ならもう言う事はない。」

・・・・・見せてやるよ、俺の記憶を！

「【術指揮選択】【記憶操作】【渡る記憶】！」

（スバル）
「後悔なんてしないよ！」
私達はまだナイアの事を知らなさすぎた。
「ならもう言う事はない。」
ナイアは自分の事を全く話さない。だから・・・
「【術指揮選択】【記憶操作】【渡る記憶】！」
だから、こんな簡単に記憶を見る　なんて言ったのかもしれない。

（スバル、ギンガ、ティアナ）

怖い、気持ち悪い、おぞましい、禍々しい。こんなにも沢山の負の感情がナイアの記憶にちりばめられていた

”彼は”古髪豹化は、普通の高校生だった。変化が起きたのはゲームセンターから寮へと帰路を急いでいるときに起きた。

彼に力を与えたのはナイアそっくりの女の子だった。そしてはじめの世界、その世界は生物災害で消えてしまった。

その世界で見た地獄・・・・・

大量のゾンビに囓られて泣き叫びながら、自分を助けてくれなかったナイアを恨みで血走った目で睨みつけながら死んだ子供

一緒に町を脱出するために戦った彼の仲間は達口封じのために皆殺しにされた

その後、アンブレラ壊滅のために集まった戦友達

人体実験の末に怪物となって襲いかかってきた人々

いつもナイアは泣きながら、泥と血にまみれながら戦った。そしてある時、心が壊れた。

噛まれた人間を殺して何度か感染拡大を防いでも、撃った人の親族に人殺しとなじられ

対象が人質を取ったら、狙撃して殺して人質を救う。だが、やはり人殺しと言われた

でも、彼は戦っていた。仲間の敵を討って、世界中の人間が助かるように、少しでも多く助かる人がいるように

だけど、結果は失敗　人間は全て死に絶えてしまった

・・・・・・・・・彼は死体が歩き回るだけとなったその世界を去っていった

そして、今に至る。

今なら分かる。何故彼は犯人を射殺したのか・・・そうしなければすべてを失うかもしれなかったからだ

「ギン姉、ティア・・・・・」

「・・・なにかしら？」

「・・・・・・・何よ？」

「あのさ・・・三人で謝りに行こう？」

「そうね」

「そうよね」

ごめん、ナイア。ナイアの気持ちも知らないであんなこと言って

「「「行（こう）（きます）！」」」

いま、行くから！

第十三話　【新オリキャラ登場】（後書き）

いや、なんていうかですね調子に乗って長々と書いたのはいいんですが、うっかり
百合と魔改造を忘れてました。すいません、次回に必ず入れるので
どうか今はご勘弁を

第十四話　【原作キャラ崩壊？はっ　知　っ　た　事　か　！】（前書き）

もういっちょ投下です

第十四話　【原作キャラ崩壊？はっ　知　っ　た　事　か　！】

あの後三人が謝ってそのまま帰宅する事になった

訓練校に帰った後、スバルはそのままどこかへ消えてしまった。やっぱり刺激が強すぎたのだろうか

そんなわけで今はティアナと2人で何となくグラウンドを散歩していた

するとティアナがこんな事を言い出した

「ねぇナイア、銃の撃ち方を教えて欲しいんだけど」

「止めておけ。執務官になるってのにそんなことしたらなれるものもなれなくなるぞ」

兄貴の夢を次いだんだろ？

どうやらこの世界のティアナの兄貴は本編とは少し違って、死んだ後、部隊全滅の責任を上官からなすり付けられたらしい

そのせいで今まで色々と苦労が絶えなかったとか

だから執務官になって兄貴の無実を証明したいってこの前に聞いたが

だけどいったん銃を手にしたら執務官への道は永久に閉ざされる。長年のティアナの夢が消える・・・そんな事はあってはならない。

「それはもういいわ。結局、他人の受け売りなんだし・・・それに、他の方法でもそれは叶えられるって気がついたから」

「・・・じゃあ、どうするんだ？」

「あたし、ナイアと一緒にみんなを守りたい」

「どういう事だ？」

「ナイアの過去を見て分かったの。この組織のやり方じゃ隙間から零れ落ちる人がたくさん出てくる、その人たちを少しでも多く救うのなら手段なんて選んでられないって・・・」

「だから私はナイアと一緒に世界を飛び回って私みたいな人を助けたい・・・ろくでもないことに巻き込まれる事も承知で、よ。だから・・・私をつれてって？」

俺に付いていくって事はろくな目に遭わないことを覚悟しているって事か・・・

ブルーの瞳がその決意を持って俺を見つめる。ああもう、仕方ないな全く・・・

「そうかい。分かった。一緒に行こう」

取り出したブーツナイフで人差し指を切る。そして血が滲み出たのを確認してティアナの口に指を差し込んだ

「んっ・・・んく・・・・ん・・・んく・・・・・・甘い・・」

一心不乱に血を嚥下するティアナ。その様子はかなり背徳的だった

「んく・・・ちゅっ・・・も、もうこれくらいで必要量は過ぎたんじゃない？」

指を見ると傷がもう無くなっていた

するとティアナが段々顔を赤くしてモジモジしだした

「どうした？何かあったのか？」

するとティアナはこんな事を言い出した

「えっとね、その、体が熱くて・・・ムズムズする・・・・・・／／／／／／／／」

え？ナンダッテ？

見れば足が内股になって太股を何故か擦り合わせている

え？何でこんな事になってるの？

「・・・・ッ！！」

少し血で汚れた唇、朱の指した頬、スカートをぎゅっと掴む手、擦り合わせられている太股

や、やばい・・・凄くかわいい・・・こ、これは俺的にジャストミートだぜ！これはもう

「・・・ねぇ、あんたって元は男なのよね？」

「は、はい？！」

なんだ、唐突に？！

「ねぇ、だったらさ、私があんたを好きになっても問題ないわよね？」

は、はいぃぃぃ？！

「い、いや、確かにティアはかわいいと思ってるし実際今すごくいいと思うんだけどなんていうか俺でいいのかなとか何とか思っていたりんぐう？！」

ちょ、不意打ち？！いきなりキスしてきましたよこの子！！！

「・・・と、とととととりあえず部屋行くぞ、部屋！」

「ん」

その後すぐに俺はティアナを抱えて転移魔法を発動させた

第十四話　【原作キャラ崩壊？はっ　知　っ　た　事　か　！】（後書き）

はい、というわけティアナ魔改造計画開始です（ぁ

そして思いのほか百合表現が難しい・・・

第十五話　【大佐！性欲を（ｒｙ】（前書き）

お久しぶりです、発砲スチロールです。
なんだかお待たせしました

第十五話　【大佐！性欲を（ｒｙ】

ぢりりりりりりりりりり！　パスン！　ガチャン！

耳元でけたたましい音を立てている目覚まし時計を枕の下に隠していたＰ９９（サプレッサー付き）で撃ち抜き、沈黙させる
起きあがろうと脇に手をつくと何か温かくて柔らかいものをを掴んだ

「・・・ん？何だ？俺のベッド、こんなに上等なものだったか？
って、あぁぁぁぁぁ？！何で？！」

毛布をはがすとそこには何故か全裸で熟睡中のティア。ついでに俺も全裸・・・・・・って

「・・・・・・・・・・あ゛！？」

思い出した！あの後、スッゲェティアナが可愛くて思わず　性　欲
を　も　て　あ　ま　す　　ってなってそのままティアの事
食っちゃったんだった！！オーマイガッ！やべぇ、どうしよう？！
っつーか、こういったシーンは男の時に体感したかったな俺・・・
何が悲しくて女同士で・・・・・いや、ティアもなかなか積極的で
良かったけどね？

「うう～ん・・・・・ないあ？・・・・・」

どうしよう・・・ティアの合意があったとはいえ、かなり恥ずかしいぞコレ

ティアナが起きてきたらなんて言おうか、とか、色々染み付いてるシーツはどうやって処分しようか、とか何とか
思考の海に浸っていると、傍らで熟睡していたティアが跳ね起きて俺は押し倒されてマウントポジションを取られ

「んぐぅ？！」

唇を奪われた

更にそれだけでは飽きたらず

「（ちょっ舌！舌！舌入ってきてっ！？ティアさーん？！）」

「（何よ、昨日はもっと凄いことシタじゃない♪）」

うがあああ！！念話でわざわざそういうこと言うなあぁぁ！！

「「んふっ・・・・・ふぐっ・・・むぐぅ・・・んちゅっ・・・ふぅん」」

「（ティア、誰かが入ってきたらどうする気だ？！早く離れろって！）」

「（うるさいわね、あたしは今ものすごく欲いの。だから観念して私にヤられなさい！）」

「（ちょ、おま、性格変わってません？！）」

「（そこはあたしも驚いたわ。まさか自分がレズビアンだったなん

て知らなかったわよ）」

「（だ・か・ら、ナイアが責任とってあたしを良くして？）」

「（責任って何のこっちゃ？！　って、うぎゃぁぁぁぁぁ！！食われるうううう！！）」

「「んああ！・・ふあんっ・・・ひゃうっ・・・あ・あああ・・・・・」」

こ、これ以上はやばい！条令とか法律とか色々引っかかるって！

助けて大佐ー？！応援を・・・応援を頼む！　『うん、それ無理』ってネロお前ー？！

だが、ここまでされるとこっちもその気になってくるわけで、そのままそっと右腕を動かしてティアを・・・って

「ん？」

廊下に誰かいる？この足音と歩くテンポは・・・なんだ、スバルか・・・・・

って、え゛？！スバル？！ヤ、ヤバイ、こんな所見られたら訓練校中に情報が流れちまう！どうにかしないと、不味い事ｎ

がちゃ　　やっば、入ってきた？！

「ＷＡ－ＷＡ－ＷＡ－忘れ物～～～　ってうわぁ？！」

「ご、ごめんなさい！ごゆっくりいいいいい！？」

谷口？！・・・・・・・・スバル、そのネタはベタ過ぎないか？っつーかお前、何処でそのネタ見たんだ？

「ナイア・・・・・さっきのは？」

ああ、やっと正気に戻ったか

「不味い事になったぞ、ティア。スバルに今のを見られた。おそらく俺たちの関係がもう暴露されているだろう」

「あぁあぁあぁ～～？！」

もう一人のルームメイトにバレてさすがに顔を真っ赤にするティアナ　というか、何であぁあぁ～　なんだ？

羽入か？羽入なのか？！羽入なんですね？！

「ど、どうすんのよ？！教官にばれたらヤバイわよ？！」

たしかになぁ・・・コレは、どうにかしてごまかすしかないか？

「どうするのよ？！」

・・・・・・・とりあえず落ち着けティア、冷静さを失ったら何も出来なくなるから「わ、分かったわよ・・・」うん、よろしい

「・・・・・で、何か作戦でもあるの？」

ああ、とっておきのがあるぜ

「秘密裏にこの血液その他諸々の液体が付着したシーツを処分して後はいつも通りにしていればいい。何か聞かれても知らぬ存ぜぬで通せば後は自然消滅するだろ」

「なるほどね、良い作戦だわ。でも、どうやってシーツを処分する気？燃やしたりしたら煙で人が集まってくるわよ？」

ビニール袋に入れてあのカバンに入れれば見つからないだろう。その後に隙を見て廃棄する気でいるが？

「そう、それならいいわ。　で、この後はどうするの？」

・・・・・あ～、とりあえずティアと一緒にシャワーでも行くか。色々とベトついて気持ち悪いし

「そうね、いいかげんに血とかも洗い流したいわ。乾いて肌に張り付いて気持ち悪いわ」

朝練してる奴らに紛れ込んでシャワーの個室に入れば何とかバレずに済むと思うが・・・

一応、光学迷彩でも掛けていくか

「ティア、魔法で姿を消していくから着替え持ったら俺に抱きついて。一緒に行こう」

と、顔を赤くしながらもティアが頷く

「わ、分かったわよ・・・・・・・・」

（ティアナ）

「何コレ？」

無事、何事もなくシャワーを浴びて部屋に戻る途中に妙な紙切れを拾った。どうやら何かの新聞記事のようだ

「何々『驚愕！　ナイア様は百合っ娘？！　寮内での爛れた性活とは！？　ルームメイトＳ・Ｎ氏が語る衝撃の事実』って何よコレ？！」

何処の馬鹿よ？！こんなのばらまいたのは？！

「発刊元　ナイア様に罵ってもらう会　（通称Ｎ２）協力　訓練校内男女交際正常化委員会　（通称Ｋ．Ｄ．Ｉ）ですってぇ？！」

どっちもナイア絡みの集団じゃない！あのバカスバル、一体とれだけの人に話したのよ？！

「ッ！！」

と、何処からか殺気が放たれていることに気づく・・・・・あれ？
あたしってそんなこと出来たっけ？何だかナイアとそういう事した後から

こんな事が多いわね

とりあえず、スバルとちょっとお話しした方が良いかしら？

その後、早めに実銃になれていた方が良いということで午前の自主訓練から私も実銃を使って訓練することになった

扱い方はナイアの血のおかげでよく分かったから、後は自分にあっ

たものを選べば良いだけらしい

結局、私が選んだのはＦＮファイブセブンとＦＮＰ９０、コンデンターピストルの三挺。ナイア曰く、どちらも貫通力の高い特殊な弾丸を

使用しているけど、ナイア自身が更に弾頭に加工を施してバリアジャケットを貫通する強力な弾らしい

って何だか凄くヤバイものを渡された気がするんだけど・・・・・・・・・

それに、なにこのおっきい弾・・・私の手のひらじゃ隠せない位の大きさじゃないのよこれ。ちょっとナイア、コレ一体何の弾？

人に使うには少しオーバーキル気味じゃない？

「ん、７．６２？×６３。主に鹿撃ち用だけど？」って、人にそんな物撃ったら不味いでしょ！！

「いや、練習で使うのは実弾じゃなくてゴム弾だから。実弾を訓練で使えるわけないだろ。・・・俺とティアは不死身だから良いけど」

ああそう、ゴム弾。それなら良いけど　って何であたしまで不死身なの？「いや、俺の血飲んだでしょ」それでそうなるの

「ああ、そういうことだ。さて、そろそろ始めることにしよう。グラウンドに行くぞ」

りょーかい、さてデバイスとはやっぱり違うんだろうな
撃ち方とかはそのままでも良いのかしら？
それともナイアみたいに身体強化術式で強化した方が良いのかしら？
「ナイア、練習ってなにやるの？」
そういえば練習ってだけでなにも聞いてないわね
「んー、今日は初日だし、軽く基礎トレーニングと銃の分解整備の仕方とその他の座学をやる」
まぁそこ辺りが妥当な所ね
「じゃあいきましょ、よろしくね」
「あいよ、まかせとけ」
待ってなさいよ、すぐにアンタの隣に並んでやるんだから！

（おまけ）
「よし、じゃぁ、まず始めに腕立て、腹筋、背筋、スクワット千回を五セット、その後この強化骨格を着て脇の装備を担いでグラウンド百周な」

「無茶言わないでよ！！っていうかこの強化骨格何か体のラインが浮き出てハズいわよ！それになによその銃の山？！それにコレってミニガンってヤツよね？！」

「俺は前の世界だとそれにもう一挺ミニガン持って二挺いっぺんにぶっ放してたぞ。俺の血を飲んで俺と同じになったんだからそれくらい出来るようになれ。それと、その強化骨格だけど、ティアの鎧だから。バリアジャケットを上に羽織れば対物小銃で撃たれても痛いだけで済む最高級品だ。それに俺を始め、遊撃隊のメンバーはコレ着て出撃してるぞ？顔もすっぽり隠れるんだから文句言うな」

「・・・・・・わかったわよ」

「じゃあさっさと始める。３　２　１　ＧＯ！」

「って、ちょっと？！これの何処が軽いのよ？！めちゃくちゃハードじゃない！」

「あ、そうそう、最終試験は前の世界で俺と一緒に一週間ゾンビ狩りをして、生き残ることだから」

「ちょ、それ酷？！」

（おまけ２　突撃銃の組立（制限時間あり）中）

カチャ、カチン、ガチガチガチッ、パチン、かきょん、ジャキン！

「終わったわ！」

「タイム八分五十三　前より早いのは良いけどそれ、スプリング入れ忘れてるぞ？」

「ああ？！」

「やり直し！ほら、早く分解しろ！そんなので撃ったら銃身がぶっ飛ぶぞ！」

「すいませんでしたー？！」

（おまけ3）

「ねぇナイア、この銃のスライドロックの外し方がよく分からないんだけど・・・」

「ああ、ワルサーＰＰＫか、それは弾倉を抜いてからスライドを軽く引っ張ると戻る」

「へぇ、おもしろい構造してるわね、それにこの銃小さくていいわ」

「この銃は携帯しやすいからな。、俺も良くそれを持って町に出たからな」

「何のためによ？」

「ん、不意に通行人が噛みついてきたりしたときの反撃用」

「あっちの世界のときなの・・・」

「あはははは、そんなにあきれた顔すんなってせっかくのいい顔が台無しだぞ？　どうだ、一本？セブンスターだけど」

「貰うわ。・・・火無いんだけど？」

「発火のルーン使えるだろ」

「ああ、そういえばそうね。忘れてたわ。」

「・・・ふぅ結構慣れると美味しいのね、タバコって」

「分かってもらえて何よりだ」

「ねえナイア、私たちこんな所で一服してていいのかしら？点呼の時間過ぎてるわよ？」

「問題ない。何故か急に自己練習のみになったってスバルが言った」

「ふぅん・・・”何故か”　ふーん・・・・・・・・・・・・ねぇナイア、今度は教官達になにやったの？」

「ん～、”山吹色の菓子”と”白い粉”。ああそれと、裏風俗店である人をＶＩＰ待遇で接待したら皆、キレイな笑顔でＯＫしてくれたけど？」

「ほんとに大丈夫なのこの学校？！すっごく不安なんだけどあたし？！」

「いゃぁ～、この体たらくだと、どっちかっていうと管理局自体がもう寿命な気がするけどね」

「なお悪いわよそれ！！」

ちなみにティアナが背負った装備は

ブーツ（つま先鉄板仕様）、右レッグホルスターにグロック１８Ｃを仕舞って、
１００連ダブルドラムマガジン仕様のＧ３　ＳＡＳを一点スリングをつけて右手側にぶら下げて、左側には普通のＧ３を一点スリングでぶら下げる
ミリタリージャケットのポーチにはＧ３の通常弾倉を８本突っ込んで、別のマガジンポーチも取り付けてグロック１８Ｃの５０連弾倉を４本収納、
左足にレッグマガジンポーチを取り付けてＦＮ　Ｐ９０の弾倉を６本収納して
背中に機銃の弾薬ボックスを背負い、ＧＥ　Ｍ１３４”ミニガン”をボックス右側面にマウント、ボックスの左側にアームスコーＭＧ（リボルバーランチャー）Ｌを括り付けて
最後に、ＦＮ　Ｐ９０を持って左腰にマチェットナイフ（刃渡り３５？）を括り付けて完成

と言った凶悪装備でした。いや、やりすぎたかな？

第十五話　【大佐！性欲を（ｒｙ】（後書き）

発砲「なんだか疲れたよ、パトラッシュ・・・」　ガクッ

えー、これ一話を書き上げるのになにやらすごい時間がかかりました（笑

もう少し更新速度を上げていきますのでどうかご容赦を・・・

第十六話　【日常編　つまりは何もしないグダグダの日】

（ティアナ）

ヂリリリリリリリリリリリリリリリ！

昨日は一日”何故か”急に自己練習のみ、ってことになったからナイアに一日中しごかれたからすっごく眠いわ

あー、もう、本当に容赦ないんだから

いきなり千回腕立てとか普通無理よあんなの

何が「俺のティアへの愛がこもったドキ☆ドキ訓練メニュー」よまったく

普段の訓練校のメニューがまるで準備運動に見えてきたわ

「・・・・＃＃＃」

それにしても五月蠅いわね、この目覚まし・・・もう少しくらい寝かせなさいよ　って

「きゃ？！」

どしゃっ！！

「痛～～～っ腰打った・・・・・（泣）」

今日もナイアと一緒に寝たからそのせいで・・・・・・それに驚いてベッドから転がり落ちるなんて、今日のあたしはどこか抜けてるようね

・・・・・・・・いや、腰が痛いのはほとんどナイアのせいだけど

と、ベッドからモゾりとナイアが腰を叩きながら起きあがって強化骨格を着た後、枕元の着替えに袖を通している。

ふとこっちに目線をよこすナイア

「・・・なにやってんだ？ティア？そんな所で転がって」

何って・・・そんなのアンタのせいでしょうが！

「アンタに昨晩いじめられたせいで腰が痛いの！！」

あたしはヤメテって言ったのに・・・あんな・・・・・・・・・・・・・・・

「俺はその後ティアの反撃でその三倍は酷い目にあったんだが？」

う・・・・それは・・・色々・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ねぇ？

「し、仕方ないわね。それでチャラって事にしてあげる」

「おいおい、俺だけ酷い目に遭ってるじゃないか」

知ったことじゃないわ、まったく・・・

あたしも強化骨格を着用して、その上から訓練校指定のトレーニング服を着るとホルスターにはアンカーガン?を突っ込んで

カートリッジ満装の弾倉を二つポーチに入れる。

アンカーガン?はナイアがコルトガバメントの外装を元に作ったヤツで、ブローバックが切ってあって

装填されたカートリッジが使えなくなったら手動でコッキングして次のカートリッジを装填するもの。使いやすいし、装填数も

7発に増えて頑丈になったしグリップ下部にスパイクを取り付けて接近戦もできるようになって言うこと無しの良いデバイスのことで、訓練で最近使い始めたあたしの得物その一

後三つは昨日選んだＦＮファイブセブンとＦＮＰ９０とコンデンターピストルだけど、ファイブセブン以外はケースに入れて持ち歩くから

今は机の上に乗っている

ふとベッドに視線を向けるとだらしなく涎を垂らして寝ているスバルがいた

「ちょっと・・・もしかしてあたし達コイツがいるの忘れてあんな

に盛ってたの？！」

だとしたらこれからなんて顔を合わせればいいのよ？！凄く気まずいわよ？！

「ん～、そういえばスバルのヤツ昨日、俺たちの情事を熱心に観察してたぞ？」

「はいいいいぃ？！ち、ちちょっとアンタ、知ってて何で止めなかったのよ？！」

普通はそんな所見られてたら恥ずかしいでしょ？！

「いゃあ、偶には見られながらってのでも興奮するかな～と、思ってな」

なっなななっなっなななっ

「なに言ってんのよ朝っぱらか「う～ん、ナイアもティアもうるさ～い、いつもより早く起きちゃったじゃん」ってスバル？！起きたの？！」

「うん、ついさっき。いや～、昨日はずっと2人の事観察してたから寝不足だよ」

は、恥ずかしい？！これはナイアに言っておかないと！！

「ナイア！これからするときは結界とか張ってするわよ！良いわね？！」

「うぃ～す」

全くもう、朝っぱらから不幸すぎよあたしったら・・・・・・

「ティア、スバル、朝飯食いに行くぞ」

「あ、待ってよ、今着替え終わる所・・・お・・わった！さ、いこ！」

スバル着替えるの早？！

「ティア～、置いて行くぞー？」

「あ、ちょっと待ちなさいよアンタ達！！」

（訓練校内食堂）

朝練組もやってきて混雑してきた食堂内での時間短縮と言うことで俺が２人の分も注文と受け取りをすることになった

割り込んでくる奴らを殴り飛ばしながらカウンターに向かう　っていうか、何でこんなに順番守らないヤツが多いんだ？

「ハァハァ・・・・イイ・・・」「もっと殴って・・・踏みにじってください！！」「ああ～～！！　気　持　ち　イ　イ　！！」

・・・・・・・・・・・・ナニモキコエナイ、ナニモキコエナイヨ

ボクハ

と、とりあえず、カウンターに着いたし、注文してさっさと受け取ってさっさと席に着こう・・・

「スパゲッティ混沌盛り１つとＡランチ１つ、あとカレー１つ　ああ、水も一杯貰う」

「あいよ、ナイア　少し待ってな、今そっちに持って行くから」

出来るだけ早くしてくれると嬉しい・・・さっきから後ろに変態が渦巻いているんだけど？

「ハァハァハァハァハァ・・・・・イイ」

「もっと叩いて、いやむしろ撃ってください！」

「ナイアタソのためなら死ぬる！！」

ダレカタスケテーーーーーー！！！

「あいよ！スパゲッティ混沌盛り1つとAランチ1つ、あとカレー1つ。それと水お待ち！」

「ありがとさん、じゃあねえええぇぇ！！」

盆三つをひっ掴んで2人がいるテーブルへと向かう（逃げる）。途中、また変態の突撃にさらされたがその時は

「【フレシェットスフィア】撃ち抜け！　ファイア！！」

久しぶりに使う魔法でそいつらを蹴散らしながら向かう

あ～ぁ全く、突っ込んでくる変態の数が減らない。コイツら殺しち

まおうかな？五月蠅すぎる

・・・いや、もしかしたらギャグ補正がかかって死なないかもしれないけど

「だあああぁぁぁ！！！【フレシェットスフィア　ジェノサイドシフト】ファイア！！！」

吹っ飛んで頭冷やしてこい間抜けえぇぇぇぇ！！！！！

次々と吹き飛ぶマゾヒストには一瞥もくれずにただテーブルに向かう・・・・・・・・・・・・・主に俺自身の精神的健康を守るために

（ティアナ）
「うわぁ・・・・・・・」

さっきからナイアルラトホテップ様に罵られる会のメンバーがナイアに特攻して玉砕してるわ・・・

っていうか、ナイアのあの魔法、オリジナルかしら？見ない術式だけど　って？！

「なに連射してんのよアイツ？！」

あたしの耳が正常なら、アイツは今ジェノサイドシフトって言ったわよね？！アイツはなに考えて　って、あああああ？！
食堂のテーブルが？！椅子が？！まるでミキサーに掛けられたフルーツのように？！

何で誰も止めないの？！流血の惨事が起きてるのよ？！

食堂で食事を取っている教官や実力があると言われている人々に目

線を向ける。と

「・・・・・（サッ）」「・・・・・・・・・・（ササッ）」

目を背ける　他称　実力者のみんな。しかもあろう事か教官達まで視線を外している

全く持って役に立たない奴らね、コレならまだ場末のゴロツキの方がまだ役に立つんじゃないの？

え？あたしは止めないのかって？嫌よそんなの。勝手にマゾ共が集まってナイアに吹っ飛ばされてるだけじゃない

大人しくナイアがこっちのテーブルに来るまでスバルと無駄話でもしてるわ

第十六話　【日常編　つまりは何もしないグダグダの日】（後書き）

はい。今回の話は題名の通りの駄文でしたw
それに短いですからもう一度更新しようと思います

それでは、次を待ちください

第十七話　【日常編その二】

（スバル）

・・・・・・・・えっと・・・一体コレはどういう状況？

「なに？！ゼルレッチぃ？！」

「ええぃ、クソックソックソッどうしてあのじーさんが来てるんだよ！！　ティア！遊撃隊の隊舎に行くぞ！部屋から自分の装備持ってこい！」

「え、ちょ、何でよ？！いくら何でもそれは・・・」

「コレでも足らねぇ位だよ、俺も今日ばっかりは魔法や魔術書を使わないなんて言ってられない。そら、早く取ってこい！」

「ああもう、わかったわよ！後でちゃんと理由教えなさいよ！」

「わかったよ！」

さっきまでは普通に食べてたのに、ナイアが電話に出たらこんな状況に・・・

それに、ナイアが魔法を使わないといけない相手ってどんな相手だろ？

何だか相手がどんな人なのか凄く気になった私はナイアに聞いてみた。すると帰ってきたのは・・・

「一人で本局の艦隊とオーバーSランク以上で構成された師団を笑いながら殲滅できる人外だよッ！っつーか、そんなに気になるんならそいつの前に一人で放り出してやろうか？！」

う・・・なにそれ・・・それってもう人じゃないよね・・・・・？

「ご、ごめん！そんな人の前に放り出すのは止めて！私死んじゃうよ？！」

そ、それならナイアも魔法を使わないとだめっぽそうだね・・・って、それより下の実力しかない人をナイアは魔法なしで倒せるってこと？！それっていくら何でもチート過ぎだよ、ナイア・・・

そう思っても口に出したら命がないような気がしたから黙っていたらナイアがあのカバンを呼び出して何か作業をし始めた

ナイアが取り出したのは、大きな箱と、大きい金属の塊　て、あれって？！

「ブローニングM2”キャリバー”？！」

え、ちょ、それって確か爆発する弾丸をバンバン撃つヤツだよね？！

これは自分も良く覚えている銃だ。ナイアが途中入校してきて初めての訓練で使ったのがこの銃だった。あの後、グラウンドがボコボコに
なっちゃって教官が凹んでたっけ・・・

「あのときは大変だったよねぇ・・・連帯責任で私とティアまでグラウンドの整備してたし・・・・・・」

と、思い出に浸っているとナイアがトレーニング服の上に白い外套を羽織ると弾薬ボックスを背中に背負って
何だか昔おとーさんと見た地球製の映画の主人公みたいにになってるし・・・なんて名前だったっけ・・・？

ああ、そうそう、たしかランボーだったっけ？アレ凄かったよな～

→段々訳が分からなくなってきたから現実逃避中

「ええい、何で宝石のじーさんが俺を訪ねてくるかね！」

金属製リンクの弾帯をボックス下部から引き出してブローニングに装填、ブローニング本体はボックス左側面にマウントすると
ネロを嵌めて右腰のブックホルダーに”外神技法記述書”を仕舞い込む。

準備は出来た。あとはティアだけど・・・「ナイア！準備できたわよ！」来たか

「このまま隊舎に跳ぶぞ、ついてこい！【術式選択】【転移】」

「分かったわよ、もう・・・【術式選択】【転移】」

（遊撃隊隊舎）

「「だーっはっはっはっはっはっはっ！！」」

「なかなかイケるではないかナイア！流石、魔法使いを名乗るだけはある！」

「いやいや、じーさんもなかなかじゃねぇか、一般人だったらそれをイッキで空けられるわけないだろーが」

「何を言うか、儂もお主も人では無かろうよ」

「あ～、そうだったなぁ～、でもティアも俺と同じだよなぁ～♪」

「おお、ナイアよ！すでに伴侶もいるのか？！」

「ふはははは！どうだ、良いだろう！」

「・・・・・・・・・・・・・・・はぁ」

なによこのカオス・・・さっきまで別室で話していたと思ったら急に宴会なんて始めて

まだ昼間よ？なに考えてるのかしら2人とも・・・・・・・・

「君も大変だな。」

ハルチョフさん・・・分かってくれますか。

「曹長！貴様も来い！そして飲め！」

「は？！いや、あの、まだ職務中であります大尉！飲酒は規則違反に「うるさい！飲め！」ちょ、うおおおおぉぉぉ！？！？！？」

あああああ、とうとう他人も宴会に引きずり込みだしたわよあの酔っぱらい共！

ホントにこれどうすんのよ！ナイアがあんな事言うからこうなったようなもんじゃない！

（数時間前　遊撃隊隊舎　隊長室）

「・・・・・・」

「・・・・・・・」

「・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・」

このじーさんは一体何をしに来たのか？とりあえず２人で話がしたいって言うから隊長室で話してるんだが・・・

ずっと俺の目を見つめるだけでなにも話さないし、何だか少し笑顔

だし・・・マジで何しに来た？
始め顔を合わせたときに戦う意志はないと言って宝石剣を俺に放り投げてきたがそれがまた逆に気持ち悪いんだが・・・・・・・
・・・・・ちなみにその宝石剣は今テーブルの上に置いてあるんだが一応、敵意を持っていない証として寄越したんだろうけど何だかそのままだと話しづらいし、返すか・・・・・・・・・
「・・・宝石翁、貴方に敵意がないのは宝石剣を此方に渡したことで分かった。これは貴方にお返ししよう」
「ほぅ・・・第二魔法の全てといってもよい宝石剣を調べもせず儂に返すか・・・これはまた、面白い」
と、何故か感心してる翁。なんかしたか？俺・・・
「どういう事でしょう？」
聞いてみると、ニカッと笑ってとんでも無いことを言った
「なに、儂と同じく世界を渡り歩き、積極的にその世界に介入する若者を見つけてのう。いゃあ、アレは痛快だったぞ、久しぶりに腹を抱えて笑わせて貰った」
・・・・・・見てたのかよ。っていうか笑ったって・・・
「では、いったい何のために？」
「いや何、そんな面白い者と飲みながら少し話をしたいと思っての

う」

遊びに来たんかい！！

それならもっと無難な所に現れてくれ、こっちの胃に悪いから！！

「はっはっはっはっはっはっ！！まぁそう腐るな。今日は良いものを持ってきておる。これじゃ！！」

そういって取り出したのは一升瓶

「日本酒ですか？」

「意外か？儂も偶にはこういった物が飲みたいのじゃよ」

はぁ・・・・左様で

と、さりげなく瓶の銘柄に目を向けて絶句する

「ッ！！　そ、それは？！細雪（ささめゆき）！」

今年の品評会で大絶賛され現在超品薄状態で買える確率は宝くじよりも低いという日本酒でゲンヤが地球にいる知り合いに手に入れてくれるように頼み込んでたアレか！！

なんてこった、こんな所でお目にかかれるなんて

「ど、何処でそれを？！」

「いゃあ、この前旅行に行った日本の海鳴と言う町の酒屋に運良く

売れ残っていてな、つい買ってしまったのじゃ」

こっちの世界には魔術協会無いからって安心してたらこれかよ！？
マジで勘弁してよ！？

「ははははは！そら、次はお主の番じゃ。いい酒を持ってこい！」

むぅ・・・たしかに、翁はあんなに貴重な一品を出したんだしここは俺も出すべきか。・・・よし、アレを出そう

そう思って棚からそれを取り出す

「むっ？！そ、それは？！」

どうやら酒飲みの勘でこれがいかほどの物か察知したらしい

「俺のコレクションの中でこれが一番の逸品だ！こんな時にこそこれを飲まずに何を飲むってんだ！」

「「・・・・・・ふふふ」」

翁と目が合って確信した

「アンタとは何だか話が合うな宝石翁、・・・いや、キシュア！」

「そうじゃな」

2人は堅く手を握りあった！！

「「ソウルブラザーよ！！」」

こんなめでたい日に訓練校になんかいられるか！

「今日は飲み明かすぞ！ゼルレッチ！」

「ふはははは！久しぶりに旨い酒が飲めそうじゃわい！」

そして、先ほどのカオスが出来た

（以上、回想終わり）

（ティアナ）

「あはははははははは！」

「ふはははははははははは！」

「皆も遠慮せずに飲め飲め～」

「大尉～、酒がなくなりましたぁ～」

「買ってこぉ～い！金は俺が持つ！」

「ふはははは！随分気前が良いのう、ナイア！」

「そうでもね～って、金はどこぞの麻薬カルテルからぶんどったのがまだ残ってるからな！」

「それはまた面白いのう！」

「大尉太っ腹～～！」

「よっ男前！」

「あ～はっはっはっはっはっはっはっ！！」

「はぁ・・・・・・・」

頭が痛くなってきたわ・・・他人まで巻き込んでどうするのよ

「って、あれ？」

酔っぱらい集団の中にナイアがいない。・・・何処行ったのかしら？

「うぃ～、ティア～～～」

「ッ！！！後ろ？！いつの間に回り込んだのよアンタは！」

「あはははは～獲ったぁ～♪」

その声に続いて胸元に伸びる手

そんでもってそれを執拗に揉みまくる

ナイア、場所考えなさい？遊撃隊のメンバーが目を皿みたいにしてこっちを凝視してるんだけど？！

出来れば早急に離れたい所だがもがいても簡単には離れてくれない。

「ちょ、ナイア、いい加減離し、ひゃああ？！」

この馬鹿！そこあたし弱いの知ってるのにって、コイツわざと触ってるわね？！

「あふっ、うんっ！このお！！」

これ以上触られると色々と不味い気がするので脱出を試みる

「やっ！」

まずナイアの左足のつま先を思いっきり踏みつけて拘束から逃れる

「はぁっ！」

そのまま人中（人体急所　よい子は真似しないように）に右ストレートをたたき込みそのまま訓練校に転移して逃げ込む

「【術式選択】【転移】少し頭冷やしなさいよバカナイア！！」

こんな事につきあってられないわ、さっさと帰って自主訓練でもしようかしら

（おまけ）

「ｗｅａｓｅ．，あせふじこ～～」

「大尉ぃぃぃ！」

「ああ、大尉が！ヤバいってこれ！痙攣してるよ？！」

「はっはっはっ！まっこと、面白い奴じゃ」

「大尉、大尉ぃぃ～～～～！！」

（おまけ２　遊撃隊部隊長室　デスクの上の電話）

〈ぴぴぴっぴぴっぴひぴっぴぴぴっ〉

ティアナが訓練校で自主連を始め、隊舎での宴会も終盤へとさしか

かった頃、ナイアの机に置かれた電話が鳴っていた

『（がちゃ）今私は電話に出られない状況にある。用がある者は時間を空けてかけ直すか留守録に録音を頼む』

『（ピーーーッ）こんにちわ、リンディです。さっき会議で決まったんだけど特殊機動隊０課は今月限りで試験運用期間終わりって事になったから、そろそろ隊舎を引き払う用意をした方が良いわよ？それと、貴方とその部下の皆さんは機動六課にまるまる転属になるからよろしく♪　じゃね、お仕事がんばるのよ、ナイアさん　（がちゃ）ツー、ツー、ツー、ツー・・・・（録音を終了します）』

（おまけ３）（時空管理局本局第三休憩室）

「あら、レティじゃない。貴方も休憩？」

「ええ、さっき会議がやっと終わったから息抜きしたくて」

「へぇ、何の会議よ？」

「０課の試験運用期間についてよ。今月限りですって」

「あら、予定よりも随分早いわね。後数年は予定していたんじゃなかったのリンディ？」

「それが思いの外難色を示す派閥があってねぇ・・・検挙率は局内最高記録を塗り替えて、そのくせ隊員の消耗率は０％の事実上最強の部隊なんだけど、やっぱり質量兵器の使用に反発があって上の印象が良くないのよ」

「消耗率ゼロって・・・とんでもないわね。ああそれと、リンディ、これ同僚から聞いた話なんだけど、彼女達の部隊は裏世界じゃ怪談みたいに語られてるらしいわよ。曰く、

「銃とデバイスをくわえた狼の隊章を付けた部隊に出会ったら十字を切って神に助けを乞うしかない」って」

「ず、随分な言いようね・・・・・・・・・」

「それだけじゃないわ、全く口を割らないとある犯罪組織の大幹部がいたんだけど、担当官が試しに「遊撃隊の隊長が取り調べに来る」って

言ったら、そいつが「知っていることは全部話すからそれだけは勘弁してくれ」って泣きついてきたんだって」

「汗）・・・・・・・」

第十七話　【日常編その二】（後書き）

またしても駄文投下です。後もう1話くらいは更新しようと考えています

第十八話　【え？なにその原作ブレイク？】

あの宴会の後、明日が辛くなりそうな気がした俺は仮眠を取るために仮眠室のベッドで休んだ

てけりり！　てけりり！　てけりり！

「・・・・・・・・・・・・・・」

ブンッ！！

ガシャンッ！

鳴り出した目覚まし時計の音がイロイロとやばい気がして体を起こすのと同時に左手で鷲掴みにして壁に叩きつけてぶっ壊す

「・・・・・・つうかこんな目覚まし買ったっけ？」

まあいいか

時計を見ると時刻はそろそろミッドの通勤ラッシュの時間だ

今日も部隊は通常勤務だし俺がいなくても大丈夫だと思う

・・・それにそろそろ訓練校に戻らないとまずい

少し焦り気味に身繕いしてから訓練校の自室に座標を合わせる

「もう少ししたら全員起こしの号令だよな・・・ティアとスバルがうまく誤魔化してくれてるといいんだけど【術式選択】【転移】」

（訓練校　自室）

「っ到着！って、あれ？なにしてんの、お宅ら？」

自室に着いて辺りを見回すと何故かティアとスバルが荷造りをしていた

・・・なんで？

「あ、ナイア！アンタも早く荷物まとめて行くわよ！」

「そうだよ早く早くー！！」

・・・・え？え？何？意味分かんないんだけど？！

「さっき急に”全訓練生は荷物をまとめて集合しろ”って学長からのお達しがあったのよ！」

「な、なんだかよく分からんがとりあえず荷物をまとめりゃいいんだな？！」

「そう！」

ということで個人スペースに置いてあった少しの衣類とロッカーに収納していたアサルトライフルと弾丸のケースをカバンに放り込むと三段ベッドの下や机の下を覗き込んで弾薬などの残しておくと不味いものが転がっていないか確認する

「確認終わり！準備完了！いつでも出れるぞ二人とも」

「私もスバルも終わったわ！行くわよ！」

ホントに慌ただしいよなぁ・・・・・・・

（第一演習場）

集合場所を知っている二人に先を譲って俺はその後ろを走る

「っとと・・」

二人の足が止まる。目的地に着いたらしい

普段はミッド式の訓練生が射撃魔法の練習に使っているこの場所は今、荷物を持った訓練生がひしめいている

一体何が始まるんだ？

それからしばらくすると、学長が壇上に上がって大事な話があると言って話し出したがその内容は俺にとっても予想できないようなとんでもない話だった

曰く、最近凶悪犯罪の発生率が上がり局員が激減していて前のようにすぐ対応することが出来なくなった。そしてそれを知った局の上層部が訓練生の動員を決定した

よって今から言い渡される部隊に即、出向してそのまま局員として

職務に当たること

「オイオイオイ！なんじゃそりゃ？！いくら苦しいからってそれはまずいだろう！！」

何考えてんだ制服組のアホ共は？！頭煮えてんのか？！学徒出陣じゃあるまいし！

つーか常識で考えて普通訓練生がいくら来ても部隊のお荷物になるだけだろうに

『まず２４５地上部隊へはリグリット・ケイ、マースド・コールドマン・・・』

「っちょ、待てやコラァ！！」

もう出向する奴の名前読み上げてる？！

「ええぇぇーーー！！ど、どうしようティア？！」

「落ち着きなさいスバル。こういう時は偶数を数えるのよ　２、４、６、８、９・・・・・」

「二人とも落着け！！そして数えるのは偶数じゃなくて素数だ！それに9は奇数だぞ！！」

二人もいい具合にテンパっている。まぁ、それは他の訓練生全員に言えることだが・・・・・

『・・・そしてナイアトース・トホテップ・・・一尉は原隊復帰
そして・・・・・・』

「・・・は？」

え、マジで？やった！帰れる！！

・・・そういえばティアは何処の所属になるんだろう？

『ティアナ・ランスターは特殊機動隊０課へ出向するように・・・・
・・・・・・・・・　それでは各自、自分の向う部隊へ向かいなさい
以上』

おおう、ティアも遊撃隊に来るのか・・・うん、今少しだけ制服組の人事に感謝したい気分だ。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1マイクロメートルくらい

「・・・それはともかく、聞いたな。行くぞ」

「ああもう、わかったわよ」

「「【術式選択】【転移】！！」」

（特殊機動隊０課　隊舎）（ティアナ）

私とナイアが隊舎に着いてからすぐに先任の隊員を集めて私の歓迎式とナイアの隊長復帰記念パーティが開かれることになった

・・・といっても、一回ここには来てるからみんなとは顔見知りで、ほとんどのメンバーとはもう挨拶も済ませてあるから今日のこの集まりは本来なら形式上の物のはずだった

でもそれも大事だからということで隊舎の多目的ホールで今、小規模な立食パーティーを開くことになったんだけど・・・・・

「えーりん！えーりん！」

「ごっすん　ごっすん　五寸釘～♪」

「ざ～ん～こ～く～な天使のように～♪」

「え、えっと、そんなわけでこの特殊機動隊０課にこの度配属となりましたティアナ・ランスターですよろしくお願いします」

まぁ、そういうことならって思って私もあらためて挨拶をって思ってたのに・・・一体これは何の騒ぎ？

「抱きしめて！銀河の果てまで！！」

「イッキ！イッキ！イッキ！」

「銀河よ、俺の歌を聞けェ――――！！！」

「ただの人間に興味はあｒｉ・・・」

「フフフ・・・認めたくないものだな、若さゆえの過ちというものは・・・・・・・・」

「くけけけけけけけけけけっ――――！！」

あー、つまりこれって・・・

「この人たち歓迎会にかこつけて騒ぎたいだけなんじゃないの？！」

「「「「そーですね！！」」」」

「そこで声合わせて肯定すんじゃないわよ！！」

なんか、いるだけで疲れるわ、この部隊・・・

こんな愚連隊がどうして管理局で一番の検挙率を誇ってるってのよ・・・

「・・・そいつはな、管理局中央部の派閥争いと腐敗のせいさ」

と、眉間にしわ寄せて理由を考えていると、やけに得意げな顔をし

た隊員の一人が上機嫌に話しかけてきた

何で私の考えが分かったのよ・・・もしかして顔に出てた？

「っていうか酒クサッ・・・・・・・・・・・・」

どうやら出来上がっているらしいその人はこっちの都合に関係なく独りでに話し始めた

「そもそも近年、犯罪が凶悪化してきて、ただでさえ少ないレアスキル持ちや高ランク魔道士などの俗に言うエースって奴らが次々と殉職していってるてのも理由の一つだが

一番の理由は局内で蔓延している汚職、派閥争いが原因さ。それにこれのせいで犯罪組織が力をつけてきてんだよ」

「・・・それ、どういうこと？」

飲みすぎで紅潮したアホ顔とは全く逆の、まるで自分が見てきたかのように話す彼の話に引き込まれていく

「なぁに、簡単な話さ。もうこの組織も寿命ってこった・・・・・・

・・自分の懐に銭溜めて自分の派閥がデケェ顔するために同僚に金を配りてぇが金がない

だから搾っても文句がでねぇトコか文句をいわせねぇようにしたとこからとことん搾り取るってこった」

「搾り取れるところって・・・？」

「んなの、脱税か悪人とつるむかのどれかだろ」

「・・・具体的に言うと？」

話は段々と人の目に触れられない局の暗部へと向かっている

正直、このまま話を聞いていたら私は局の正義をまったく信じられなくなるような予感がした

後悔するんじゃないかという予感があった

だけど、この話は聞いておかないともっと後悔しそうな気がした・・

・

そう思って聞いた真実は私の信じていた今までの常識を軽々と飛び越した人でなしの所業の数々だった

「具体的っつうと・・・そうだな・・・俺が聞いたことのあるやつだと・・・マフィア、カルテルとかの犯罪組織との癒着かな。保護した次元漂流者をそのまんま”市場”に流したり、

生きたまんま臓器抜いて裏で売りさばいたり、その他にも身寄りがないガキを保護するって名目で集めて男は奴隷か鉄砲玉にするために組織に回して、女は複数の組織を通って

薬漬けにしてから娼館に放り込まれる。・・・ああ、

もしもガキの中にレアスキル持ちや高魔力保持者なんかがいたらそいつらは局の違法実験所に持ってって変態共の玩具にされて変なヤクぶち込まれたり

機械埋め込まれたりして遊ばれるんだ。その後は・・・まぁかろうじて人の形留めてるだけの薄汚ぇ肉片が出来上がりってこった」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

彼の話を聞いていて、ふと周りを見渡す

あれだけ騒いでいた隊員たちはいつのまにか静まり返り、彼の話をただ黙って聞いている。あのナイアまでもが手を止めている

ホール内にいる二十数人が物音ひとつ立てずにいるその光景は異様だった

そして彼はまだ語り続ける

「そうやって手に入れた金をばらまいて局内の地位や派閥を買うんだよ。そして、そういう奴等が自分の邪魔になりそうな人物や派閥をどうにかしようとして組織に金を払って

邪魔な個人を殺させたり、相手の派閥の資金源を潰そうとして、今度は組織同士の戦争が勃発して一般人が死んでそれを世論から非難されて局が重い腰を上げてその戦争の鎮静化に

エースを派遣、と見せかけて実はそれは口実で漁夫の利を狙う高官の策略だったりと、色々と屑がいんだよ、いまのここには。それに・・・・・・」

話が終わったころにはもう日も落ちて皆の酔いもさめていた
片づけもそこそこに、次々と通常勤務に戻っていく

ナイアもさっきクロノ提督から通信が来たといって部隊長室にこもってしまいホールにいるのは私と彼だけ

そんな時ふと、何でそんなことを知っているのかが気になって聞いてみた

「ねぇ、なんでそんなこと知ってるの？」

「・・・俺はもともと監察官でな、仕事でこういった事を追ってたんだ」

それである不正を追ってたら危うくミッド湾の底に沈められそうになっていたところを大尉が助け出してくれたんだ、といってその人も配置場所に戻っていく

誰もいなくなったホールの中、私は呟く

「そう。・・・それにしても、管理局がこれほどにもイカレた組織だったなんてね・・・・・・・・・・」

まったく、なんて皮肉なんだろう

私は今まで兄さんを殺したのは犯罪者だったと思っていたし、そうだと教えられてきた

だけど、彼の話を聞いた限り、そうじゃないんじゃないかって思えてきた

もしかして兄さんは管理局に殺されたんじゃないか・・・と

「・・・・・・・もう今日は休むわ」

心の整理がつかない。今の私はどうしようもないイライラを抱えている

こんな状態で職務が手につくはずない

部屋に帰って休もう

（おまけ）（部隊長室内での会話）

『よかったのか？ティアナをあのまま一人にして？』

「大丈夫だ。それより、何か分かったのか？お前から連絡なんて珍しいじゃないか」

『ああ。君が部隊に復帰してからの周りの反応なんだがな。すごいぞ、どの派閥も君に異常ともいえる警戒心を持っている』

「まぁ、何時ぞや吹っ飛ばしてやった戦闘機人の研究所を皮切りに、片っ端から襲撃して血の雨降らして回ってたんだから当然か」

『・・・その途中僕は君に何度も鉢合わせして体にいくつトンネルを開けられたことか』

「そりゃいちいち突っかかってきたお前が悪い。それに、昔の事だろ？今じゃ俺の事助けてくれるし」

『そうだな・・・君と話していくうちに目が覚めたからね。運が良かったよ僕は』

「ははは、それが果たして運が良かったかどうかは俺には分からんがな」

『僕がそう思ってるんだからいいんだよ。・・・そういえば、ナカジマ三佐の方に渡したＭ－８２Ａ１の方はどうだ、形にはなったか？』

「ああ、時々訓練校抜けて１０８部隊の連中で筋のいいやつを鍛えてるんだが、中々いいぞ。魔法なしでも１．２００ｍ先のマンターゲットにヘッドショットかましてる」

『ほう、それはすごいな。半年前まで銃を握ったこともないミッド人がこんな短期間でそこまで上り詰めたか』

「ふん、よく言うよ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・確かお前は拳銃使って２０ｍ先のマンターゲットに当てるのに半年かかったよな
んでもって腱鞘炎で死んでた時にエイミィに愛銃勝手に持ち出されてたし」

『・・・その後二日三日で僕と同じことが出来るようになったんだよな彼女は・・・・・・』

「ヘボヘボだなお前」

『うるさい。・・・それより、実戦に出すのにはあとどれ位掛かる？』

「もうあの鉄屑共に後れを取る事は無いだろうさ」

『・・・ということはいつでも出動可能、ということか』

「ああそうだ。それに俺の部隊もつつがなく進んでいる。後はお前の運んでくるＬＡＶが到着すれば、な」

『物は明日にでも届くだろう・・・・・・もう少しだな』

「ああ、あと少しで局に巣食う癌細胞を一掃できる」

『・・・そうだな』

「そろそろ切るぞ。そろそろあの馬鹿共が嗅ぎつけてくる」

『わかった。気をつけてくれよ』

「わかってるって・・・じゃ」

第十九話　【部隊始動・・・ってあれぇ？】（前書き）

お待たせしました。十九話投下です

第十九話　【部隊始動・・・ってあれぇ？】

（遊撃隊隊舎　格納庫）

遊撃隊が所有する車両が収められているこの場所は、出撃の際以外はほとんど人がいる事は無い。いても数人のメンテナンスクルーがいつもへそを曲げている車両のご機嫌伺いをしているだけだった

※ちなみに、何でいつもへそを曲げているのかというと、支給された車両が半世紀は過ぎたポンコツで走る度に何処からか異音が響き三分の一の確率で黒煙を吐くからで、
何でそんなものが支給されたのかといえば、十中八九本局の高官共が嫌がらせ

そのため部隊内では

「高官共のくそったれ、新しい艦船ばっか作ってないでこっちにも金寄越せってんだ。
このポンコツのおかげでどれだけ苦労してると思ってるんだか。車両の調子悪いからって現場までランニングする方になって見ろってんだ」

との恨みの声が・・・

まぁ、それはともかく、そんなこんなで部隊内では不満が上がっていた。部隊を預かる俺としてはどうにかしなきゃいけないんだが何分あの本局の銭ゲバ共はこちらの陳情や嘆願は

右から左、全く聞く耳を持たない

それどころか、遠回しにさっさと失態曝してクビになれと言ってくる始末

このままだと部隊の士気にかかわるし何しろミッド市民の安全を守るのにも差し障る

そこで、こうなったら自分で調達するか、と思い立ってクロノに協力を仰ぎロアナプラで調達した装甲車六両と兵員輸送も可能な戦闘

ヘリ一機を輸送してもらえることになった

そして今日はこの部隊にその兵器・・・もとい、治安維持のために必要なモノが届いた

しかもついでということで結構な量の武器弾薬も一緒に・・・

そのせいで今この格納庫にはメンテクルーどころか隊員まで総動員して荷物のチェックと収納に追われている

「退いた退いた！！道開けろぉ！！」

「おい、これの弾薬ってどれだ？」

「５０ＢＭＧ弾だろ？！あの箱だ！」

「９？ショート弾どこ行った？！」

「掘り出すから待ってろ！」

「この箱な～に～？」

「うわ馬鹿、こんな場所で煙草吸うんじゃねぇ！！テメェと心中なんぞ御免だ！！」

「うわ、無反動砲まであるぞ？！」

「あらららら～、閃光弾や催涙弾、発煙弾までありますよ～♪」

人海戦術で確認したコンテナはそれぞれフォークリフトで地下へ続く貨物エレベーターまで運ばれ、それから地下深くへと下ろされ弾薬庫、武器庫に運び込まれていく

その隣ではメンテクルーが装甲車とヘリに張り付いて何やら作業をしている

「・・・何してんだ、あいつ等・・・・・・・・・・・・」

よく見ると電気系統の部品を地球製の物からより優れたミッド製の物に取り換たり

機材や魔法などを用いて装甲を解析したりと忙しく動き回っている

・・・いや、ミッドには無いタイプの車両だし、興味あるのは分かるけどさ？

「変な部品突っ込んで使用不能にはすんなよ？高かったんだからなソレ」

一応釘を刺しておくと装甲車に取りついていた整備員の一人が油で汚れた顔を擦りながらにやりと笑って答える

「ご心配なく！それどころかオリジナル以上の性能を約束します！！」

そいつは頼もしいな。・・・でも、あんまり変な改造は御免だぞ？

「・・・・・・そうかい。がんばれよ」

そういって格納庫を後にする

その後、格納庫から

「ヒャッハー！新鮮な装甲車だぜーーーっ！」

とか

「物理強化魔法で装甲強化だぜウェへへへへ！！！」

とか

「機銃1挺じゃつまらねぇ！もっと武装くっ付けろおぉぉぉぉぉぉ！！」

なんていう何だか嫌な声が響いていた

大丈夫か、これ？

第十九話　【部隊始動・・・ってあれぇ？】（後書き）

これで書き溜めていたストックがなくなったので多分これからは更新速度が
また遅くなると思います

第二十話　【たのしい（？）お仕事】

俺が原隊復帰してから二日後、遊撃隊は早速仕事に駆り出された

まったく、搬入してきた弾薬を全て倉庫に納め、整備班が弄くり回していた

高機動車やヘリのテストも終えてやっと一息ついたころだっていうのに・・・

「まったく・・・俺が復帰したと思ったらこれだよ。地上のやつら、もう少し気張って仕事しろよ」

といっても、これ正式な手続きを踏んで来た命令だし文句言っても意味がない

仕方が無いからさっさと行ってぶっ飛ばしちまおう

「さっき出撃準備の放送入れてもらったし、俺もぼちぼち行きますかね・・・」

椅子から立ち上がり、そのまま部屋の隅にあるロッカーから強化骨格やら銃器やらの

治安維持活動用装備一式を取り出し、身に付けていく

今回の武装は、

バレットＭ－８２（タングステン製徹甲弾使用）

スタームルガー　レッドホーク（４４口径タングステン製徹甲弾使用）

の二挺だ

人間相手にやりすぎだと思うかもしれないが、魔導士が相手だと
これくらいの火力がないとお話にならない

そこいらのチンピラ魔導士でさえノーマルの拳銃弾程度ならシール
ドで難なく弾くし、ライフル弾でも
人体のようなソフトターゲットに高い威力を発揮する５．５６ｍｍ
のような小口径高速弾だと
少し硬めに張られたシールドに当たるとシールドの強度に弾の強度
が負けて砕け散ってしまう
・・・それに角度によっては跳弾して辺りを弾が跳ね回って危険極
まりない

よって、魔導士を無力化するには１２．７ｍｍや７．６２ｍｍなど
の比較的弾頭重量の重い弾を使って、尚且つ
極力シールドを張らせる暇を与えずに弾を浴びせかけてたり壁越し
にぶち抜いたりして無力化したほうが安全ということが今までの経
験で分かっているからだ

だからうちの部隊では武器又はデバイス持ってるやつは大口径のラ
イフル弾での見敵必殺（サーチアンドデストロイ）
を徹底している

そのせいで犯人の逮捕どころか原型留めてなかったりするんだけど、
・・・まぁ、自分の率いる隊のやつらが怪我したりするよりは
いいからとこんな方法を取ってる

ただ、そのせいで世論からの風当たりが強いのが辛い所だね

まぁ、それはともかくとして

そんな理由でこんなバカみたいな装備を背負っています

「じゃ、行くか」

第二十話　【たのしい（？）お仕事】（後書き）

ずいぶんと短くなりましたがこれからずっとこんな調子の更新量になると思います
なにしろテスト期間中なもので・・・
あと、魔導士のシールドと弾丸うんぬんのオリジナル設定ですが、それについて何かご意見などがありましたらどうぞ感想まで
では失礼します

第二十一話　【「５０ＢＭＧ弾でも食らっとけ】

さて、あの後俺とそんときたまたま通常勤務からずれてたやつら五人と
ティアナと一緒に高機動車に搭乗して現地に赴いた俺ですが、何だかとっても頭が痛い・・・

先に現場で建物を遠巻きに包囲している陸士部隊のあまりにもなチキンっぷりに

今回の事件は特別とんでもない事件ではない。時々ミッドでも起きることだし、むしろアメリカだったら
新聞の三面に載れるかどうかというようなしょぼい事件だ

正直な話、こんなことで呼び出されたのかと思うと、ちょいとクるものがある

「なんじゃそれ・・・」

「・・・・・ププッ」

隊員たちからも失笑が漏れている。いや、お前ら、気持ちは分かるがちっとは抑えろ。まだ陸士の隊長さん
居るんだから

・・・つーか、指揮権こっちに移譲したんだからさっさと帰ってくれないかね？

「お願いしますよ！くれぐれも、被害なんて出さないでくださいよ？！いいですか？！
私はまだまだ局を辞めるつもりは無いんですから！！」

「あー、はいはい。分かってますって。そうカッカしなさんな　あ、コーヒー飲みますか？」

ニホンザルみたいに顔を真っ赤にして詰め寄ってくる先任の陸士部隊隊長を適当にあしらいながら
バレットに付いたスコープの調整をする

・・・・・あーウゼェ。弛んだ頬肉震わせながら喋るんじゃねえよ、気持ち悪ィな

今俺に口うるさくまくし立てているこの男は、通報を受けて最初に現場に来て、すぐにうちの部隊に
応援をよこせと言って来た部隊の責任者だ

祖父の代から管理局に勤めていてる家の第三世で、入局時前は訓練校を主席で卒業したらしいが
どうもそんなに有能には見えない男だ

・・・つうか、卒業したときの訓練校の校長が、彼の父親だったか

ら主席になれたんじゃね？
って言われてるしな

見た目は筋肉の”き”の字すら感じられない脂肪に覆われた、俗に言う狸腹
そして肉刺（マメ）ひとつ無いつるりとした手、頬に付いた脂肪が重力に引かれて垂れ下がりブルドックみたいな見た目の顔、という容姿をしている

「（ねぇ、これで部隊の隊長って務まるの？）」

横でモスバーグＭ－５００にシェルを突っ込んでいたティアが手を止めて念話でそう聞いてきた
なのでその質問に答える

「（・・・無理じゃね？）」

どう考えても犯罪者と殴り合いできそうな容姿じゃねぇって

『こちら突入班、配置についた。・・・おーおー、わめいてる犯人の顔がよく見えますよ』

「・・・おお、来たか」

じゃ、始めますか

若干一名、役立たずが居るけどな！

第二十一話　【５０ＢＭＧ弾でも食らっとけ】（後書き）

うーん、どうしよう。すぐに決着つけるつもりだったのに次回に引き伸ばしになっちまったぞ?！

・・・うん、まぁ、次に書くってことで

第二十二話　【魔法？なにそれおいし（ｒｙ】

「・・・なんだって？もう一回確認してみろ。それじゃ話と違うぞ？！」

どうも、さっきまで騒いでた無能っぽそうな隊長から相手の装備と状況を聞いたのでそれの確認を
配置に付いた突入班のやつらにさせたら、どうもその情報とは状況が違うらしいとの報告を受けたナイアです

あの隊長（笑）から聞いた状況だと、ミッド市街地の五階建てのアパートの一室に凶悪な火器で武装した男が
アパートの住人五人（内二人は子供）を人質にとり立て篭もっているとのことだったが・・・・

「これが・・・凶悪な火器・・・ねぇ・・・」

さっきの通信で一緒に送られてきた画像を見てそう呟く

その画像では犯人が突入班に対する牽制のために立て篭もったアパートの窓から拳銃を突き出している

・・・スライドに東京マ●イとシールが貼ってある銃を、だ

「・・・・・・・。」

そのあんまりな光景に目を点にしているティアをひとまず放置して

様子を伺う突入班に命令を出す

「・・・あー、やる気だだ下がりだろうが、あれが本当に犯人なのかの確認と人質の安否が分かれば教えてくれ。以上」

『はぁ・・・、了解です。』

ため息つくなよ、余計やる気が萎えるだろ

「っていうか、いい加減正気に戻れよティア！！」

「・・・・・・・・・・・・はっ！？私は今、何を？！」

やっとご帰還か

「とりあえず確認が終わり次第俺たちも現場に行くから、装備の点検とか、そういうのは早めに終わらせとけよ」

「それならもう済んでる。問題ないわよ」

「左様か」

『確認終わりました。人質は全員無事の模様。犯人の確認も完了しました。』

「了解。では突入し犯人の確保と人質の安全を確保せよ！」

『了解！』

「ふぅ・・・」

念話を終了させると、そのまま高機動車から出て様子を見守る

と、ティアが何だか煤けたような声で話しかけてきた

「ねぇ、私たちの出番は？」

「今回は無いな。」

「・・・そう」

せっかく準備したのに・・・といじけるティア

・・・まぁ、ドンマイとしか言えないな

ああそうだ。突入の結果だが、一発も発砲することなく犯人を確保することができたんだよな

でもって、所持していたのは東京●ルイ製の固定スライドガスガン一挺だったらしい

ちなみに、この日はずっとティアが何だか不機嫌だったことも付け加えておく

第二十三話　【原作忘れてたーーーっ？！】

あれから二日後の午後、いい加減報告書出せやゴルァ！とのお達しが来たため
それからずっと机に張り付いてキーボード打ったり書類にサインしたり部隊から上がってきた
使用した弾薬の数の報告書やらをまとめる作業をずっとやっている

・・・ちなみに今日で十日目、いい加減サービス残業と休日、祝日出勤が嫌になってきた

「ああっ・・・たく、もう！！」

ストレスの所為か喫煙量もいつもの十割り増しで、何だか最近部屋の蛍光灯がヤニで薄汚れてきている

もうヤダ管理職、残業代も出ねーんだもん

そう思いながら山盛りになった灰皿にまた一本、短くなった煙草を放り込む。

っていうか、山が崩れないように注意しつつ乗せる

「・・・・・よっと、って何してんだ俺？」

なんで灰皿に吸殻乗せるのに一生懸命になってるんだ？

無駄なことに時間つかっちまった、と頭を振りながらふと机の端に置かれている電話機に目をやる

「・・・留守電？しかもリンディ統括官からだと？」

何だろう、あの人が電話してくるなんて、厄介事の臭いしかしないぞ

うわー、この留守電聞きたくねぇー・・・

第二十三話　【原作忘れてたーーーっ？！】（後書き）

お久しぶりです。これからあの三人娘と絡ませていくつもりですので
どうかお楽しみに！！

第二十四話　【引越し開始】

いくら嫌な予感がしてもこれは仕事の話かもしれんし、聞かないわけにもいかないよな

「・・・ぽちっとな。」

再生ボタンを押すと流れてくるのはいつか聞いたのと同じ、緊張感に欠けたのほほんとした声

『（ピーーーッ）こんにちわ、リンディです。さっき会議で決まったんだけど特殊機動隊０課は今月限りで試験運用期間終わりって事になったから、そろそろ隊舎を引き払う用意をした方が良いわよ？それと、貴方とその部下の皆さんは機動六課にまるまる転属になるからよろしく♪　じゃね、お仕事がんばるのよ、ナイアさん　（がちゃ）ツー、ツー、ツー、ツー・・・・（録音を終了します）』

つーか、録音された時間を見るにこれ勤務中の電話だろ？ならもう少しきっちりとしてくれよ・・・

自室で友人と茶飲み話してるんじあるまいし・・・って

「オイ待てコラァッ！！聞いてねーぞンなこと？！」

そもそもそんなことになるって本局の人事課からも聞いてないし、異動や部隊の統合なんて噂もなかったじゃねーか！！

いや、それ以前に、ウチの部隊は質量兵器の試験運用ってことで銃を使ってる部隊で主な任務はミッドの治安維持とあとマフィア、麻薬カルテルの取り締まりだぞ！

遺失物の回収、管理なんて任務外だし、対遺失物の訓練なんてしてるわけねーだろ！

というか部隊で魔力持ちなのって俺とティアだけだし、もしこの部隊でレリックを封印しろってなったら

どんだけ犠牲が出るか・・・

「ったく、やっと部隊の体裁が整ってきたと思ったらこれかよ」

またどたばたと忙しくなるな・・・・・・

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーー

と、いうわけであれから二日後、部隊を移転させるのに必要な書類を書き上げた俺は
隊員と武器弾薬が詰まった兵員輸送車とトラック、装甲兵員輸送車、戦車、さらに戦闘ヘリその他　　　を引き連れて機動六課の隊舎のある沿岸地区へと向かっていた

「まったく、引越しも自分でやれってんだからひでぇよな。あんまり舗装道路の上は走らせたくないんだが・・・」

ちなみに俺は兵員輸送車の中ではなく、先頭を走っているロシア製のＴー９０戦車の砲塔の上に座って
煙草をふかしているところだ

「・・・お？」

ガクン、と乗っていたＴー９０が停止する

前を見ると、そこにはアニメで何度か見た機動六課の隊舎があった

・・・ついに来ちまったか、ここに

「はぁ・・・」

これからどうなることかと考えると頭痛がしてくる

・・・主に原作を知っているせいで

眉間にしわを寄せて唸っていると隊舎から人影が出てきてこちらに向かって歩いてきた

「・・・あー」

歩いてくる人物の顔を見てそれを原作の登場人物と照らし合わせて名前を思い出す

「確かグリフィス・ロウランだったっけ？」

――――――

ーーーーーーー

所変わってここは六課内の食堂

なぜかガクブル震えているグリフィスに案内され部隊長である八神はやて（守護騎士＋リィン？）と
高町なのは、フェイト・Ｔ・ハラオウン等のアニメでの中核を成すキャラとの形式ばった挨拶を終えて
今は六課の隊員と元・０課隊員の俺たちとの交流ということで簡単な食事会のようなものが催され、
そこで何故か俺は部隊長命令としてガンスピン（ＭＧＳ３でオセロットがやってたアレ）をやらされていた
何故か部隊長が持っていた私物のＳＡＡ（モデルガン）で・・・・・

くるくるくるくるくるくるくるくる

「おぉ――――――――！山猫や、山猫がここにおるでー！」

部隊長はご機嫌である

「おい、二人とも。こいつ止めないでいいのか？」

はやてが騒いでいる近くの机に並べられた幾つかの銃器を眺めているなのはとフェイトに話を振る

「にゃはは、こうなったはやてちゃんは止まんないからあきらめた方がいいよ？」

「うん、私もなのはに同感かな」

左様か

この後もしばらくこの親睦会は続き、調子に乗ったはやてがＳ＆ａｍｐ；ＷのＭ－５００（８インチバレル）でガンスピンをしようとして失敗し、銃を足に落として悶絶するというハプニングが起きたが、まぁ、それは些細なことだろう

第二十四話　【引越し開始】（後書き）

三人娘がほとんど喋っていないような気がしますが、まぁそれはともかく

次回からアニメの方に入っていきます。お楽しみに

第二十五話　【冥王と遭遇】

それから次の日、親睦会の後に待っていた

六課の設立にあたった理由とか、
隊舎の施設利用のルールとそれを破った際のペナルティ等の周知徹底を行うように
とか、
女性職員に対する対応の仕方（図解付き）
など半分以上はどうでもいい内容の記載された『六課編入に際しての何某』
とかいった、人を撲殺できそうなほどクソ分厚いＡ４サイズの紙の束を隊員一人ずつ手渡され
明日までに完読してくることという命令が無常にも下された

そのおかげで隊員全員が徹夜である

いやね、俺はもう寝なくても平気ではあるんだがね？まだ日が浅いティアやほかの隊員はみんな
六課のロビーで戦死してるんですよ・・・？

この量をそんな短時間で読みきれる奴なんていねぇだろっての

隊員全員がダウンした今、一人孤独に手の中の憎たらしい資料を読み進める

ここは一服したいところだが、資料によればここは禁煙エリアで
尚且つ煙と熱の複合探知式の火災報知機＋スプリンクラーが配備さ
れているらしく
誰もいないからと言って吸えるような場所ではない

「・・・しゃーないよな」

こうなったら少し外に出て一服しながら読み進めよう

そう思って六課の敷地内のミッド沿岸が見渡せる防波堤に歩を進める

と、目の前にサイドポニーテールの人影が見えた

「・・・これはどうも高町一尉」

「おはようございます。ここは一応禁煙ですよ？」

俺の片手に握られた煙草のパッケージを視線に入れると眉間にしわ
を寄せて僅かに顔をしかめつつ
注意をしてくる

「いや、ここなら火災報知機やスプリンクラーを作動させることも
無いと思いまして。しかし、随分早いですね？」

そう、まだ太陽が顔を出してもいないというのに彼女はもうバリアジャケットを装着していた

早朝訓練か？

そう思いつつ堤防の端に座り込むと煙草を咥えて火をつけ、その場であの資料をめくる

すると彼女は一度ため息をつき、空へと上がっていく。練習の続きをしにいったのか？

それからしばらくの間、俺と彼女の間に会話は無く、
その堤防には紙が擦れる音と、風切り音だけが響いていた

第二十五話　【冥王と遭遇】（後書き）

時間を空けたのにもかかわらず、あまり出来がよくないです・・・

第二十六話　【ショタとロリとの出会い。ついでに六課でのはじめての模擬戦】

「大尉、敵機視認しました！数は６、前方１６０ｍ先。卵型のヤツです！」
「ＡＫで必中させるにゃ遠い！ＲＰＧ－７で１、２機落としてこっちに気を引かせろ！」
「了解！おい、ヴァン！」
「わぁってるって、もう準備してる！それと後方、バックブラストに注意しろよ！」

突然ですが、只今模擬戦中です。しかも、戦闘の素人（ロリとショタ）共を連れて・・・

さっきもガジェットの集団に凸ろうとした二人を捕まえて、「今の状況よく考えろ、コラ」とよく言い聞かせてから俺とティアと第一小隊の合計八人で計十機のガジェットをぶっ潰す算段を立てたところだ。

それはまず、四車線道路の真ん中に装甲車を停めその影に隠れ敵機の気を引いて引き付ける
その間にティアが単独で付近の廃ビルの屋上に登りそこからバレットＭ－８２で狙撃
この狙撃に対応しようと装甲車の影にいる俺達からティアを攻撃目標に変更したところで全火力をもってして反撃を開始し、殲滅する
という作戦を立て、実行している最中なんだが・・・何かもう、泣きそうだ

あ、いや「俺」がじゃなくて件のロリとショタｇ
「いい加減名前で呼んだほうがいいんじゃないっスか？大尉」
・・・キャロとエリオが泣きそうになってるんだよ。これが
後さ？地の文読むなよお前
「いや、何いってんすか大尉。さっきから独り言を呟いてたんでそれに突っ込んだだけっス」
「え、俺口に出してた？！」
嘘だろ全然そんな実感ないんだけど・・・

さて、話を戻そう
そんなことでいま接近してくるガジェットに向けて４０ｍｍＨＥＡＴ弾をくれてやろうとしているところだ
装甲車の陰から顔を出した隊員の一人が弾頭の装着されたＲＰＧ－７を構え、アイアンサイトで狙いをつけて
今まさにトリガーを引き絞らんとする
「援護します！」
と、ここで元気よく響き渡るショタヴォイス・・
「ってオイ、待て！射手の背後に近寄るなエリオ！」
・・・何をどう解釈したのかエリオが今にも弾頭を発射しようとしている射手の背後、もう少し詳しい場所を上げるとしたら、ちょう

どバックブラストが吹き荒れる場所
に走り寄ろうとしている
「「うぉい待てーーーー！！！」」
隊員たちもこれには慌てて、配置の場所からはずれ、エリオを止めようと走り寄る

「タァァァァッチダウンン！！」
一番近くにいたＬＮＧガンナーが持っていた軽機を投げ捨てて丸焼けゾーンに近づくエリオをタックルで
バックブラストが吹き荒れるであろうエリアから弾き飛ばす
しゅばっ！！！！ずごん！

その後、図ったかのように発射される４０ｍｍＨＥＡＴ弾は接近中のガジェットの一機に直撃し、爆散する

「次弾装填！急げ！あいつらが来るぞ！」
にわかに騒がしくなる戦場
そのとき、ティアからの連絡が入る

「（こちらティア、狙撃位置に付いた。いつでもどうぞ）」
来たか。まぁ、こっちは少しおたついたがこれで詰みだな

「（ティア、今すぐに狙撃開始だ。こちらも全火力を展開する）」
「（はいよ）」

念話を切ると隊員に聞こえるよう声を張り上げる

「装甲車の３０ｍｍを含む全火器の使用を許可する！たらふく食わせろ！！」

「「「了解！」」」

この後、多種多様な弾丸、または砲弾を浴びせかけられたガジェット・ドローンは十秒ほどで全て
穴あきチーズと化し、そこで模擬戦は終了した
この後に戦技教官のありがたーいお話を聞いた後、報告書書きが待っている

ああ、やだなぁ・・・机仕事。

第二十六話　【ショタとロリとの出会い。ついでに六課でのはじめての模擬戦】

いゃ、すいません。かなり時間を空けた上にこんな短いので

あ、それと、今回分かりにくそうな英単語が二つ出てきましたね

それの解説をここで

ＨＥＡＴ弾　成型炸薬弾、対戦車榴弾と呼ばれる弾種のことで戦車をブッ壊すために用いるものです

ＬＮＧ　ライトマシンガン＝軽機関銃のこと

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8035t/

魔法をほとんど使わない魔法使い

2011年12月28日06時50分発行